読書科学

第8巻第3号（通巻 第29号）　昭和40年2月20日発行（季刊）
昭和31年12月27日　国鉄特別扱雑誌　第3373号

特集 読書療法

読書療法研究の史的展望	室伏　武
読書療法の理論をめぐって	小野　泰博
精神医学における読書療法	阪本　敬彦
	高木　和子
C. Shrodes の読書療法論	阪本　敬彦
	山中　輝子
わが国での読書療法の研究と事例	阪本　一郎
読書療法研究に関する文献目録	野間教育研究所

日本読書学会編集

29

牧書店発行

読書療法特集号目次

読書療法研究の史的展望	玉川大学 室伏 武	1
読書療法の理論をめぐって	大正大学 小野 泰博	8
精神医学における読書療法	野間教育研究所 阪本 敬彦 高木 和子	16
C. Shrodes の読書療法論	野間教育研究所 阪本 敬彦 山中 輝子	25
わが国での読書療法の研究と事例	東京学芸大学 阪本 一郎	30
読書療法研究に関する文献目録	野間教育研究所	36

——本誌の編集に関する内規——

1. 本誌は日本読書学会の機関誌として，毎年4号に分けて発行する。
2. 本誌は原則として本会会員または会員が共同研究者となっているグループの研究発表にあてる。
3. 本誌への寄稿は，その年度の会費（年額800円）を払込んだ者に限る。
4. 原稿は横書きとし，標題・所属・氏名に対する英文を添えること。英訳を学会に任せる場合は，読み誤りやすい漢字に振りがなをつけること。
5. 図版の原図は正確なものを添えること。学会に製図をゆだねるときは，その実費を負担すること。
6. 原稿は編集委員会の選考によって掲載される。多少添削を加えることがあるが，大きな変更を加える時は筆者に相談する。
7. 原稿執筆者には，抜き刷り20部を贈呈する。
8. 本誌掲載の論文等を，無断で複製または転載することを禁ずる。

読書療法研究の史的展望*

玉川大学文学部

室　伏　　武**

はじめに—読書療法とはなにか

読書が治療的価値を持っていると考えられたのは非常に古いことである。すでに紀元前，古代ギリシャの都市テーベにあった図書館の入口に「魂をいやす所」（healing place of the Soul）という意味の銘刻がかかげられていたといわれる。この“魂をいやす所”として図書館が考えられていたことは，読書の持っている価値の一つの面をとらえたものであるといえよう。しかしながら，読書が科学的な治療的な目的のために利用されるようになったのは，この30年来のことである。

元来，読書療法という用語は，bibliotherapy（biblion＝book＋therapeia＝treatment of disease）の訳語であって，図書による病気の治療法という意味である。つまり，読書によって病気をなおす方法のことである。bibliotherapy という用語を最初に使用したのは，Samue McChord Crothers であるといわれている(1)。わが国では，阪本一郎が『読書指導』の中で「読書療法」の訳語を使用したのが最初のことであろう。

読書療法の定義について，Karl Menninger は「治療を目的とした精神衛生のために，注意ぶかく選択された図書の利用(2)」であると述べている。また，Gordon R. Kamman は「心理的食餌療法の様式(3)」であると定義している。そして，Kenneth Appel は「精神医学的治療の補助として，図書，新聞・雑誌の記事やパンフレットなどの利用(4)」であるといっている。さらに，Louis A. Gottschalk は「読書による心理療法の一つの方法(5)であるといっている。最近，改訂された Webster' Third New International Dictionary (1961) においては「医学や精神医学における治療の補助として，さらにまた指示された読書によって個人的な問題解決の指導のために，選択された読書材の利用」と定義している。

このような読書療法の定義は，それぞれの立場によって異なるが，本質的には読書の治療的効果の問題であるといえよう。そこには(1)治療の対象となる性格や行動などの精神的な問題に対して，(2)適切な治療的価値を持った読書材を与えることによって行なわれる，(3)有機的な相互作用——読書であり，それは(4)治療過程としての読書過程と，(5)治療効果としての読書反応——効果が含まれている。読書が病気をなおすということは，読書効果の治療的活用にほかならない(6)。しかしながら，読書療法は基本的には精神療法の一つであって，(1)患者の治療を必要とする精神的な問題を明確に分析し，治療方針を立て，読書材を与える適否，その時機を決定すること。(2)治療を必要とする精神的な問題に対して最も適切な読書材を選ぶこと。(3)読書材の内容に対する患者の反応によって，治療し，さらに診断，治療を進めることである(8)。したがって，ここでは読書療法を「読者（患者）と読書材との有機的な相互作用による精神療法(9)」であると定義することを試みた。

読書は，読者と読書材との有機的な相互作用である社会的事実であって，それは個人過程であるとともに社会過程である。この学習としての読者は，読書の精神作用であり，自己形成のはたらきを持っている。したがって

---

* A historical review of bibliotherapy.

** MUROFUSHI, Takeshi. (Tamagawa University. Faculty of Literature)

読書は個人の心理作用であるために，きわめて多面的な性格を持っている。D. Waples 等の調査によると，読書の効果は(1)道具的効果，(2)自己鼓舞的効果，(3)補強効果，(4)美的経験を豊富にする効果，(5)骨休め的効果があるとしている(10)。読書療法もまたその例外ではない。K. E. Appel は読書療法の価値について(1)人間の行動の心理学や生理学に関する知識を獲得すること，(2)“自分自身を知れ”といういましめに従って行動すること，(3)自分自身の外に心を向けたり，興味を見いだすこと，(4)無意識な困難点を開放することに努力すること，(5)同一化や代償のために利用すること，(6)自分の持っている問題点を明かにし，その問題解決の洞察を得ることを援助することであると指摘している(11)。したがって，その適用もきわめて広範囲にわたっている。精神療法として，単独に，あるいは補助的手段として利用されるばかりでなく，診断のためにも応用できる。そして，身体的な病気，特に長期療養を必要とする患者やその治療期間の短縮，社会復帰のためにも適用できるし，非行者，神経症，精神病はもちろんのこと，精神衛生にも利用できる。また，精神的な病気の予防，あるいは性格形成にも積極的な役割を演ずるものである。この多面性のゆえに適用範囲が広いことや，人間の精神作用の複雑性のために，読書療法の限界を決めることが難かしい。しかし限界があることは事実であって，そこに読書療法の可能性が存在しているといえよう。

本稿は，主として米国における読書療法の研究や実際を明かにし，わが国での研究や実際の手がかりを与えることを意図したものである。

A　読書療法の史的展開

読書が精神療法の一つの方法として利用されるようになったのには，いくつかの要因があった。特に，読書療法が米国において著しい発展を遂げつつあるということは，ある意味において米国の社会や文化の特長を反映しているものであると考えられる。読書がそうであるように，読書療法は，社会や文化と密接な関係があるものであって，それらを無視しては考えることができない。

1.　読書療法の史的背景

おそらく読書が病気の治療に利用されたのは，Calif al-Mansur がカイロに建てた病院において，内科や外科の治療に加えて，患者にイスラム教の聖典である『コーラン』を日夜読ませ病気の治療をしたといわれるのがはじめてのことであるといわれている。米国や英国においても，1800年代には病院において聖書や宗教書を患者に読ませていた。それがやがて，宗教書や道徳の本にだけ限定しないで，娯楽的なものにも及び，さらに患者のための病院図書館が1840年代には発達するようになった。W. B. McDnaiel, 2d によれば，こうした宗教的な努力によって読書療法が発達したと指摘している。また，第2の要因として戦争による影響をあげている。第1次世界大戦の陸軍病院の発達，赤十字や救世軍の国際的な組織による推進と第2次世界大戦によっていっそう読書療法の基礎が固まったと述べている。そして，第3の要因として，精神医学や心理学の影響を述べ，病院図書館や読書療法の理論や実際に著しい発達に大きな力があったとしている(12)。

米国における読書療法の今日の著しい発達は，これらの3つの要因に加えて，米国の典型的文化の1つともいうべき図書館の発展とその影響を見落すことはできない。特に，病院図書館においては，近年，読書療法は司書の最も高度な専門的職務であると考えられるようになってきているということである。もし，図書館が発達していなかったら，今日ほど読書療法は発達しなかったといってよいだろう。したがって，医学や心理学の発達とともに図書館は読書療法を支える主力であると考えられる。第5の要因というよりもむしろ影響を受けたものと表現した方が適切ではあるが，学校教育における適用やその普及である。特に，読書指導や生活指導，あるいは道徳教育において，問題児の治療への適用に加えて，読書による性格形成といったいわば予防として利用されるようになったことである。その結果，読書療法の概念は，いっそう多様性を深め複雑なものになったといえ

る。

かくして，読書療法は「カイロにおいて見られたような宗教によってはぐくまれ，医学や心理学によって科学的な基礎が与えられた。そして，図書館員の努力によって実際化され，教育においても応用されるようになった。[13]」

2. 読書療法研究の概観

Artemisia Junier が1900から1958年までの文献，601について分析した結果によると，次のようである。

病院図書館管理	21
図書選択	55
各種の患者に対する奉仕	120
病院図書館の司書の資質	35
読書療法の調査・研究	27
病院図書館に関する目的や基準	12
参考文献	19
読書の治療的価値	94
病院図書館の必要性や価値	50
カウセリングの技術としての読書	3
一般的なもの（主として病院図書館に関するもの）	17

のように要約されている。この中には修士や博士論文17が含まれている[14]。

このように，読書療法の研究とひと口に言っても，(1)病院図書館に関するもの，(2)読書やその指導に関するもの，(3)精神療法としての読書療法が含まれている。本稿においては主として第3の分野に焦点を当てながら，読書療法の主要な研究のあとをたどってみることにする。

a Willam C. Menninger の研究[15]

1937年に Menninger Clinic における5カ年研究の結果をまとめたこの論文は，読書療法を精神療法としてとりあげた最初のものである。この研究の主な目的は，(1)精神医学や心理学の通俗的な文献を普通の人に利用する方法と，精神病の入院患者の治療として読書資料を処方することであった。

彼の兄の K. A. Menninger の The Human Mind（人間の心）[16]に対して読者から自発的に送られてきた400通の手紙を分析した。それらの中で自分自身のために役にたったと報告しているものが18%であった。このような精神衛生に関する読書の処方や推せんは，態度や行動を変えることができると述べている。

また，5年以上にわたって医師の指導のもとに読書療法を精神病院で行なったが，(1)教育的な意図として，読書を情報源，患者自身の外に関心を向けるようにしむけ，外部との接触をさせること，そして患者自身の問題に洞察を得させるように指示した。(2)患者の娯楽となるような読書資料を提供した。(3)読書クラブ，患者の討論会や患者の出版物に図書館欄を作って，社会集団に対して同化するように援助することを目的とした。そして，医師は次の6つの機能に責任を持っていた。

(1) 図書館で購入する図書の認可を与えること。

(2) 司書が提出した患者に対する1週間の読書課題のリストを認可すること。

(3) 患者と面接したあと，患者に最初の読書課題を与えること。

(4) 司書と毎週会議を持ち，それぞれ入手した読書の結果や問題について話し合うこと。

(5) 司書に対して新しい患者について，その病歴，心理状態，読書習慣や興味などについて伝達すること。

(6) 治療を目的とした読書に関連して，患者と話し合うこと。

この読書療法の結果から最も共通して得られたものは，(1)図書の中の主人公との同一化が得られたこと，(2)自己陶酔的満足を与えられたこと——自己矛盾からの逃避，現実への接触，知識を豊かにすることによって自己の強化や誇張，社会的に認められることなどが含まれている。

このような読書療法において，宗教書を読ませることは失敗をまねくようであり，精神病患者は宗教書を読まない。きわめてまれに宗教的な手段として聖書を与えることがある。精神衛生に関する図書は，一般的に精神病

患者，強迫観念を持っている神経症や心配の状態にある者にはすすめない方がよい。精神分析的な治療を必要とするアルコール常用者，回復に近い精神病患者や心理療法の補助として知的な神経症の患者に与えるのがよいと指摘している。

b　Eleanor Mascarino と Delmar Good の研究[17]

1940年に特別な治療のために衝撃療法の補助として読書療法を行なった。これは医師と図書館員，および患者の家族との密接な協力や読書記録の重要性が強調されている。

c　Salomon Gagnon の研究[18]

529の患者の「読書記録」，あるいは「図書館記録」から資料を分析して，読書療法の効果について指摘している。529 名中，323 名（男 116，女 207）が図書館から本を借りている。また小説が 58%，非小説は 42% となっていて，普通の図書館の利用者と比べると小説を読む傾向が強い。小説では“愛”に関するものが女性に多く読まれ，この他，ミステリーや物語が男女とも多く読まれている。非小説では伝記，旅行記，宗教（聖書を含む），歴史，語学，冒険もの，随筆などの図書の貸出数は多い。これらの病気別の読書傾向では，精神分裂病において偏執病の患者だけが非小説に集中しているのがめだっている。そして男子より女子の方がこの傾向が強い。この他の患者については，偏執病や偏執病的状態のもの以外は小説を好む傾向が強い。

d　Jerone M. Schneck の研究

Menninger Clinic における読書療法の研究の一環として，Schneck は多くの研究を発表し，読書療法の科学的研究の基礎を確立した。

まず第1に，読書療法の研究のための概要を明示した[19]。次に，2つの参考文献を編集した。これまでに参考文献を作成したのは，1931 年に W. J. Bishop が 133[20]，1939 年に E. Kathleen Jones が 107[21]，の参考文献を編集しているが，これらはいずれも精神病院図書館に関するものであって読書療法に関する文献は少なかった。彼は1945年に一般的な参考文献約 350 をリストしたものと[22]，病院図書館で利用するために精選した79の文献のリストを作成した[23]。また，文献を中心とした研究を発表して[24]，科学としての読書療法の手がかりを与え，読書療法の研究を促進した。

さらに，1946年には，この研究の1つとして，読書療法の2つの事例研究を報告した[5]。この事例は，治療の1つの手段として用いたものである。1つは周期的憂うつ症の40才の家庭の主婦に K. Menninger の Love Against Hate（愛憎）[26] を使用し，心理療法の面接の中で行なわれたものである。もう1つは，4か月前より不安の徴候で治療を受けている50才の老婦人で，不眠症，神経過敏，くつろぐことができなくて疲労を感ずるなどの苦痛を訴えていた患者に対して，催眠療法の補助として用いたものである。これらの実例は，いずれも単独な治療技術として読書療法を利用することを試みたものではなかった。そして，読書療法の治療上の位置や重要性を明かにした。

e　Louis A. Gottschalk の事例研究[27]

これまでの研究や実際を分析して，精神病患者の治療の補助として読書を与える効果として，次の6つの点を指摘している。(1)患者の欲求不満や矛盾に対して，自分自身の心理的，生理的な反応を理解することを助ける。(2)治療に必要な心理学や精神医学の用語の理解を助ける。(3)恐怖，恥や罪を犯しているために自由に他人と話し合うことが常に困難な患者に対して，他人の言葉で表現された問題を通して助ける。(4)面接の間に建設的にものを考えたり，患者の態度や行動様式をさらに深く分析したり総合することを助長する。(5)教訓や実例によって，われわれの社会的，文化的な様式や子どもじみた行動様式を抑制することを強化する。(6)多様な満足や興味の範囲を豊富にするような相像力を促進する。

さらに，彼は心理療法として利用される読書療法の方

法を実証する3つの事例を紹介している。第1の事例は，性の問題で治療を受けにきた35才の既婚婦人に対して，面接によって治療を進めてゆく過程で，性に関する図書を与えて治療に成功した M. W. Gerard の事例の紹介[28]。第2の事例は，同じように性についての問題の治療において，他の療法とともに読書療法を行って成功した知的な42才の既婚婦人の事例。そして第3の事例は，蒲柳質の子どもとして母親によって過剰に保護された32才の既婚の歯科医に対して，面接による治療とともに読書療法を行った事例を示している。さらに，彼は読書療法のために患者に与えるための図書リストを編集している。

f　Thomas Verner Moore の研究[29]

児童・青少年に対する読書療法の研究は，Catholic University of America の児童相談所で行なったものが著名である。すでにわが国でも彼の研究は多くの人びとによって紹介されている。問題児に読書療法を適用する場合，児童には遊戯療法，青少年に面接によってじゆうぶんにラポートをつくりあげてから行なうことがたいせつであると指摘している。

また，C. J. Kircher は，彼の指導のもとに読書療法のための読書リストを作成した。これによって児童・青少年に対する読書療法や性格形成のための読書指導の手がかりを与えた[30]。

以上，読書療法の科学的な研究の中の主要な論文について紹介した。この他，図書館や U. S. Veterans Adminstration などにおける調査・研究や実際が進められているが，これらについてはいずれ改めて紹介したい。また，さらに詳細な研究を進められる人のために，次に文献をあげたので，研究の手がかりとしていただきたい。

<一般的なもの>

Beatty, W. K.: A Historical Review of Bibliotherapy. Library Trends 11:106-117, Oct. 1962.

また，参考文献としては，次のものを参考とされたい。

Dolan Rosemary. et al., comp.: Bibliotherapy in Hospitals; An Annotated Bibliography, 1900-1957. Washington, Veterans Adminisration 1958.

<学校教育関係>

少し古いが，次のものがよくまとまっている。

Russell, D. H. and Shrodes, C.: Contributions of Research in Bibliotherapy to the Language-Arts Program. School Review 58:335-342, Sept. 1950, 58:411-420, Oct. 1950.

B　読書療法の将来への展望

読書療法が，精神的障害の治療の基礎的研究や事例研究が集大成されて，精神療法の一分野として明確に位置づけられるためには，その技術と科学性とが確立されることが期待される。そのためには，精神医学，臨床心理学，図書館学や読書指導に携わる人びとの協力の重要性が強調されなければならない。

読書療法が発達するためには，次のような課題が解決されなければならないが，それはまた，将来への展望ともいうべきものであると考えられる。

1.　チーム・セラピーの確立

どんな学問や職業でも同じように，時代とともにますます分化されていく傾向にあるが，精神療法，特にこの読書療法は，その性格上から医師，精神医，看護婦，図書館員，あるいはソシアル・ワーカー，カウンセラーといった人びとが1つの治療的チームを組織し，医師や精神医，ないしはビブリオセラピスト（bibliotherapist）をチーム・リーダーとして，それぞれが専門分野の責任を分担しながら協力して治療を展開されることが最も効果的な方法であるといえよう[31]。

2.　処方箋による読書材の調剤

今日，医師の指示に従って薬剤師が薬を調剤するように，明日の読書療法は，チーム・リーダーとしての医師，精神医やビブリオセラピストによって処方箋が書かれ，

それに基づいて図書館員が適切な読書材を患者に提供するようにならなければならない。さらに，これらの操作が機械化され，機械による診断と処方箋の作成が可能となるだろう。

例えば，受験ノイローゼにかかった高校生について，その環境，病因や病状を詳細に分析して，多くの要素を検出し，それらの組み合せによっていくつかの型が作れるようになり，その型に応じた読書材が選択され調剤できるようになろう。

現在，米国においては C. J. Kircher が，またわが国では日本読書学会が編集した『読み物による性格形成』（牧書店）がある。これらは，ビタミン剤のような保健のための薬のリストとしての性格をも持っているものである。しかし，これが予防の薬として，また治療の処方箋となるためには，さらに個別化されたリストでなければならない。

3. プログラム化された読書材の作成

今日，こうした読書材の調剤は，既製の読書材の中から選択されている。したがって，必ずしも治療の道具として適切なものであるとはいえない。また，使用上に限界というものが生ずる結果になるだろう。

将来，それぞれの治療に対して個別化された読書材の処方のために，この目的のために読書材が作成されなければならない。おそらく，治療計画のためにプログラム化された読書材が作成されるようにならなければ，真の意味で読書療法はじゅうぶんにその効果をあげることはできないと言って過言ではない。

4. 読書指導の科学の原型

人間の性格の類型が，主として精神医学における精神病の分類に基づいていることは周知のことである。それと同じように，読書療法が，健康な人間に対して行なわれる読書指導の原理や方法を導入する原型となることが予測されよう。読書の治療指導（remedial reading）とともに，読書指導の研究における中心的課題であるといって過言ではない。特に，人間形成であるとか，性格形成をめざす読書指導の原理や方法は，読書療法の研究の成果の結果から生まれるものといえよう。したがって，別の言い方をすれば「読書指導の科学」としての性格を読書療法は持っているといえよう。

5. ビブリオセラピストの養成[32]

読書療法が，その技術性と科学性とを確立するためには，その原理や方法論が確立することはいうまでもないが，ビブリオセラピストとして，その職責が専門職として確立されなければならない。

ビブリオセラピストは，大学において医学，精神医学，あるいは臨床心理学，特に精神療法に関する原理や技術と，治療に必要な読書材に関する知識，さらに読書の科学的知識や読書指導の原理や技術などの高度の学問や技術が長期間にわたって教育されなければならない。

また，ビブリオセラピストとしての資格が医師と同じように法的に付与され統制されることが必要であって，有資格者のみがこの仕事に携わることができるようにしなければならない。そして，ビブリオセラピストとしての倫理綱領を確立し，真の専門職としての地位を確立することが重要である。そうすることが，読書療法を発達させることになるものといえよう。

おわりに

すでに述べたように，読書療法は米国の社会や文化の中で著しい発展を遂げてきた一つの文化の型であると考えられる。したがって，われわれがこの方法を単なる技術，あるいは科学として移入することには問題がある。

読書療法は「日本人の国民性やその文化に密接に関係がある，というよりむしろそれによって決定されるといってよい[33]。」日本の精神風土の中で，どのような役割を持ちうるか。そして，わが国の社会の発展にいかにして寄与できるかということがたいせつである。

参考文献

(1) Beatty, William K. A Historical Review of Bibliotherapy. Library Trends 11:106-117, Oct. 1962.
(2) Bryan, Alice I. Can There Be a Science of Bi-

bliotherapy? Library Journal 64:773-776, Oct. 1939.

(3) ————The Psychology of the Reader. Library Journal 64:7-12, Jan. 1939.

(4) Appel, Kenneth E. Psychiatric Therapy. In Hnut, J. M. ed., Personality and the Behavior Disorders. N. Y., Ronald. 1944. Vol. 2, P. 1130-1133.

(5) Gottschalk, Louis A. Bibliotherapy as an Adjuvant in Psychothrapy. American Journal of Psychiatry. 104:632-637, Apr. 1948.

(6) 室伏武　読書に於ける治療的価値　図書館学会年報 5:49-60, 1958年7月。

(7) 上掲書　p. 56.

(8) 室伏武　読書療法について　看護技術 Vol. 3. No. 12, p. 72-83, 1957年12月。

(9) ————読書に於ける治療的価値　前掲書 p. 56.

(10) Waples, D., Berelson, B. and Bradshaw, F. R. What Reading does to People. Chicago, Universty of Chicago Press. 1940.

(11) Appel, K. E. op. cit. p. 1107-63.

(12) McDaniel, W. B. 2d. Bibliotherapy, Some Historical and Contemporary Aspects. ALA Bulletin 50:584-589, Oct. 1956.

(13) 室伏武　読書に於ける治療的価値　前掲書　p. 50-55.

(14) Junier, Artemisia J. Bibliotherapy, Projects and Studies with the Mentally Ill Patient. Library Trends 11:136-146, Oct. 1963.

(15) Menninger, William C. Bibliotherapy. Bulletin of the Menninger Clinic 1:263-274. Nov. 1937.

(16) メニンジャー，カール A. 草野栄三良訳　人間の心　日本教文社　昭和25年2巻

(17) Mascarino, E. and Good, D. Reading as a Psychological Aid in the Hypoglycemic Treatment of Schizophrenia. Medical Bullectin of the Veterans Administration 17:61-65, July 1940.

(18) Gagnon, S. Is Reading Therapy? Diseases of Nervous Systens 3:206-212, July 1942.

(19) Schneck, J. M. Studies in Bibliotherapy in a Neuropsychiatric Hospital. Occupational Therapy and Rehabilitation 23:316-323, Dec. 1944.

(20) Bishop, W. J. Hospital Library and Bibliotherapy, A Bibliotherapy. Library Association Record (England) 1:198-200, 231-32, 274-75, 1931.

(21) Jone, K. Hospital Libraries Chicago, ALA. 1939.

(22) Schneck, J. M. A Bibliography on Bibliotherapy and Hospital Libraries. Bulletin of the Medical Library Association 33:341-356, July 1945.

(23) ———— A Bibliography on Bibliotherapy and Libraries in Mental Hospital. Bulletin of Menninger Clinic 9:170-174, Sept. 1945.

(24) ———— Bibliotherapy and Hospital Library Activities for Neuropsychiatric Patient, A Review of the Literature with Comments on Trends. Psychiatry 8:207-228, May 1945.

(25) ———— Bibilotherapy for Neuropsychiatric Patients, Report of Two Case. Bulletin of the Menninger Clinic 10:18-25, June 1946.

(26) メニンジャー，カール A. 愛憎　日本教文社

(27) Gottschalk, Louis A. Bibliotherapy as an Adjuvant in Psychiatry. American Journal of Psychiatry 104:632-637, Apr. 1948.

(28) Gerard, M. W. Alleviation of Rigid Standards. In Alexander, F. and French, T. M. et al. Psychoanalytic Therapy. N. Y. Ronald. 1946. p. 233.

(29) Moore, T. V. The Nature and Treatment of Mental Disorders. 2nd ed., N. Y., Grune & Stratton. 1951. p. 216-232.

(30) Kircher, C. J. Character Formation Through Books. 3rd ed., Washigton, Catholic University of America Press. 1954.

(31) cf. 室伏武　読書療法について　前掲書 p. 80-82.

(32) cf. Kinney, Margaret M. The Bibliotherapy Programs, Requirment for Training. Library Trends 11:127-135, Oct. 1962.

(33) 室伏武　読書による問題児の矯正指導　学校図書館 No. 167:13-16, 昭和39年9月.

読書療法の理論をめぐって*

大正大学

小野泰博**

たしかに読書療法という概念も，そのあるべき姿，完結した望ましい概念的イメージだけが先にできあがっているのに，まだその内実が伴っていない領域の一つである。読書の影響力ということについては，自明のことではあるが，では果して，どんな人に，どんな時に，どんな本を，といった読書効果の積極的使途（処方）という問題になると，これは容易ではない。

もちろん理想としては，既存の図書だけでなくもろもろの読書材の内容を，読者に与える影響（作用・副作用を考慮して）の点から分析して，その化学組成にもあたるべき要素を抽出し，それをもとに新しい読書材の文構成を考えさらに，カプセル，ブドウ糖にもあたるべき潤色をほどこすという段階も予想されないではない。さらに効果力という点では，宣伝文，宗教団体の出版物にみられる積極的効果への心理学的配慮に十分学ぶべきものがあるのは当然である。

さて，一般に歴史の若いプラグマティズムのアメリカにあっては，ヨーロッパ以上に，あらゆる分野にわたって How-to ものの読みものが多いことである。また，ヨーロッパや，東洋におけるように，読書というものが，長くエリート（読書人）の独占するものであった過去ももたず，リーダース・ダイジェストにみられるように，意味のある内容のものだと，かいつまんでてっとり早くというのがアメリカの気質である。こういう国柄であればこそ，bibliotherapy というような，治療のため読書の積極的利用という考えも生れ，これを技術からさらに科学に高めようという努力もはらわれているのである。

しかしアメリカでも bibliotherapy の生れる母体であった病院図書館にあって，いまでも多くの無頓着な医師たちは，図書室とは，退屈で怠惰な落着かぬ患者の時間つぶしにする場所位にしか考えていない。どちらかというとやはりレクリエーション的意味の方が一般的である。ところで bibliotherapy は精神療法の補助として，とくに社会復帰（rehabilitation）の一助として自覚されてきた。しかしいわばまだ試行錯誤的段階にあり，十分理論的にも裏付けされているとはいえない。理論，実践ともに模索前進の段階である。ここにもプラグマティズムの国アメリカの若さがある。よさそうだと思うことなら，どしどしとり入れてみよう，そして訂正するのだという積極性がみられる。理論の構成についてもとくに読書療法だけの理論というよりも，現在のところ，精神療法そのものの概念から出発しているように思われる。その中でもとくに，ダイナミックな考え方と同時に，精神療法面での人間関係論（interpersonal theory）ともいうべきサリバンの説にもとづいている点が注目される。

精神療法における人間関係論

アドルフ・マイヤー以後のアメリカ精神医学を考える場合，Harry Sack Sullivan (1892–1949) の影響をぬきにして考えることはできない。フロイドが「死の本能」とか「生の本能」とかの人間の基本的行動目標をあげているのに対して，サリバンは，(1)満足（satisfaction）と(2)安全（security）という二つの行動目標をあげている。前者は飲食とか性欲，睡眠とかの専ら生理的要求の満足

*On the theories of bibliotherapy.

** Ono, Yasuhiro. (Taisho University)

追求を意味し，後者は身の安全といういわば社会的，文化的な条件をさしている。しかもさびしさ，孤独感が起るのは，お互いに身体をふれ合って身の安全を保ちたいという要求ゆえ，両要求の中間に位置することになる。なおサリバンの場合，満足欲求よりも，安全追求の方が重要な位置をしめている。彼の理論の根本をなす対人関係現象としてのパーソナリティー概念は，フロイドと同様，幼児期の発達過程を重視するのではあるが，フロイドのように神経疾患を幼児性欲の発達のゆがみ，退行・固着現象として説明するのではない。むしろ，幼児期における子どもをとりまく環境内での重要な人物との対人関係の場からパーソナリティーは発展もするし，ゆがめられもするという見方をとっている。生物学的に生命の始まったばかりの子宮内の受精卵のとき，その細胞と環境とは一つのものとして解きがたく結合している。生後，幼児は母親との親密な関係に入るにつれて，重要な対人関係のプロトタイプが形成されていく。そして生物体としての人間には，自我の能力を拡大，実現してゆきたい欲求があり，これをサリバンは権力への動因（power motive）と呼んでいる。これは，ゴールドシュタインの自我実現（self-actualization）やホルネルの自我実現（self-realization）にあたるものである。そこでパーソナリティーの成長は大部分この権力への動因が，それに伴う安全追求が，どのように，対人関係の場で満たされていくかということにかかっている。

さてこの安全追求はなにより，対人関係の場で他者，仲間に受容されることから，集団に所属したいという欲求まで進んでいく。幼児が泣くという現象を考えてみるに，幼児は満足の局限（euphoria）と緊張との間を行ききすることによって成長していく。泣き叫ぶと，まず呼吸が活発になることで，酸素供給への欲求が満たされ，その救助に母がやってくることで食欲もみたされる。この動作が繰りかえされるうちに，幼児はどうすれば欲求緊張から解放されるかという見通しを得る。この泣くことで母親の反応が得られたということは，すでに対人関係の場であって，欲求緊張から出た幼児の活動に対応して，母親の側には，幼児の欲求解除に必要なやさしさ（tenderness）として経験されるもう一つの緊張が生まれる。このような幼児の泣き叫びは，対人関係を保つ最初の道具の役を果している。後になるとことばというシンボルが発達して，これが仲間との関連において安全追求するための有力な文化的道具となる。

しかし，ことばないし複雑な情動表現ができるずっと以前に，幼児の文化受容（accuturalization）は共感（sympathy）を通して行われているのである。この共感はいわば“情動的伝染および伝え合い”（emotional contagion and communion）であって，母親が幼児に食事を与えるとき，怒ったり興奮していると，子どもも不安になり，食事をとりたがらなくなってしまう。母親が不安定な気持でいるとき，この不安は子どもに伝染する。幼児初期において，すでに子どもは，母親の声の調子，やさしい愛撫（gentle caressing），愛情のこもった世話によって，自分の餓えや，不快，さびしさの泣き叫びが答えられることで，母親に承認（approve）されているか承認されていない（disapproval）かを知る。

しかもサリバンによると，幼児の不安は，重要な対人関係の世界で，重要な人物から認められないのではないかと心配（apprehension）するときに生れてくるのである。意識的認識以前に，すでに幼児はこの母親の不承認を感じとり，不安を味う。幼児にとって母親からうけ入れてもらえないということは，きわめて不吉な，気味の悪いもので，自分と自分をとりまく人間界との関係の全面的なおびやかしと解せられる。幼児は身体的欲求の満足だけでなく，もっと包括的な安全性をこの母親との対人関係の場によって求めているのである。したがって，ここで幼児の感ずる不安は，表面的なものでなくて，むしろ全面的な“宇宙的”体験（cosmic experience）として感ぜられる。

母親に承認されるとごほうびがもらえる。承認されないと罰と不安特有の不快を味わわねばならない。ここで不承認と承認，不安とごほうびという体系が生れ，これで個人が文化を受容し，教育されていく重要な支点とな

る。かくて，子どもは承認された自分の行為からこれをgood-me としてまとめ，不承認の行為は bad-me としてまとめられ，恐怖・薄気味の悪い経験は not-me としてはずされ，自我一体制（self-system）ができあがっていく。いいかえれば承認される活動と不承認の活動との間を区別する必要から自我が生れることになる。そして他人の評価が自我一体制をつくるともいえる。そして持続的，かつ習慣的になったパターンとして一々の行為が参照される中心がＩ（私）であり，このパターンがダイナミズム（dynamism）とよばれる。

さて，幼児は不安をひき起すような行為を排除していくだけなく，認識自体も制限をうけることになる。不安回避と安全維持のため注意の焦点がきまり，いわゆる選択的無関心（selective inattention）の現象が起る。これはフロイドが，前意識とか無意識とかいったものに相当する。しかもこの選択的無関心によって，意識されない部分は分離し，サリバンのいう分離力動（dissociation dynamics）が生じる。すなわち自己の安全をおびやかし，不安を生じるようなことは意識にのぼる前に斥けられるのであって，この分離はフロイドのいう抑圧に近い。そこで認識から排除された分離力動が自動的に自己の中で動きまくり，あたかも自己の外からくるように働きだすとき分裂病的恐怖脅迫感となって出てくる。また不安による認識野の狭小化は，認識を限定する一段と厳格な方法として強迫神経症症状となる。そして不潔恐怖のように，不潔ということだけに意識が集中され，社会生活がうまくいかなくなる。

では，幼児体験の際の意識の分離に起因する疾患を治療するとはどういうことかというに，その幼児の精神発達を示すことばとしてサリバンは，並列的ゆがみ（parataxic distortion）ということばを使っている。サリバンは人間関係の発達過程を基礎として人格の形成を考え，乳幼児体験の発達三段階として次の三時期をあげている。

(1)原初期象徴化の時期（prototaxic symbolization）

(2)並列的　〃　（parataxic symbolization）

(3)構成的　〃　（syntaxic symbolization）

(1)は乳幼児が世に出てはじめてもつ経験であって，自分と外界との明確な区別もなく，時間・空間の未分化な状態で，重症の精神病症状にもたとえられる。

(2)は，未分化な世界がようやく分化してくる状態で，味覚・嗅覚・触覚等が分化してくる。しかし並列的という修辞学の用語を借りているように，この段階は，文法にたとえると，まだ接続詞によって文が論理化される以前の状態のように，体験が並列的に続くだけで，前後，全体が秩序だっていない。しかも他者との通じ合いのシンボルも現実の検証を経ない，いわば独断的なもので，私的言語，内閉的言語（autistic language）である。この内閉言語は，子どもの夢想や空想の中で，子どもにとって特別な意味をもった私的体験に属する。時に分裂病の患者などが人には通じない新発明の言語新作（wortneubildung）するのにたとえられる。しかも幼児は，さきほどの分離や選択的不注意によってかたよった対人関係を結び，そこに母親の空想的人格化（fantastic personification）を行い，成長してからのちも，この対人イメージにしばられ，現実に出合う人間に対しても，幼児期に自分が親に対してとった態度パターンでもって接することになる。これをサリバンは parataxic distortion（並列的ゆがみ）とよんでいる。フロイドの転移に相当するものであろうか。

したがってサリバンの場合，治療ということは，患者が常に他者を自己の空想的人格と同一視してしまうという並列的ゆがみを解きほどくことになる。フロイドの場合だと，ここに患者と治療者との間に転移現象が起り，患者の無意識的葛藤を意識化させるという分析が行われることになる。サリバンは治療化の仕事を，患者のもっている不安や敵意を幼児期の障害の反応として生じているのだということを患者が認識できるよう，協力することであるとし，また治療するものの立場を治療に参与しながらの観察者（participant observer）ということで強調している。以上でサリバンの対人関係の場を重視する精神療法を概観したのであるが，では彼の所説が読書療法

の理論づけに，どの点で利用できるかという問題に移りたい。

読書療法における原理的なもの

サリバンの所説は，もちろん治療専門家による治療過程以外に，幼少期につくられた「並列的ゆがみ」が，その後の青年期の仲間との関係によっても訂正されると述べておる。さらに，さきに述べた構成的象徴化の段階といわれる段階に進むことで，ここでは体験に秩序ができ，いままでの私的言語が共通言語となることである。よってコミュニケーションが可能となり，自分の経験を他の人たちの経験によって，確認される段階で，これを合意的確認（consensual validation）とよんでいる。ここでは，自己および外界を客観的・論理的に観察し，他人と共通の概念，シンボルで意志を通じ合えるようになる。しかもサリバンによると，この合意的確認に達するには，治療者によるだけでなく，友人関係ないし，時にはかならずしも肉体をそなえた人間そのものでなくても，人間関係の場の重要な他者（significant other）としては“本”自体が役に立つのではないかとみていることである。“一般に，実在の人間であろうと，書物の中にだけ存在する想像上の人物（imaginary people）であろうと，もう一人実在の人間が一緒にいるならば，そこに，何らかの関係のわく組（frame of reference）が対人関係の場（interpersonal situation）を補い合って完成できる”，とみている。また対人関係の場の相手となる人間の貧弱な環境にあっては，多様で豊富な図書がその限界を広げてくれる手段となると述べている。また図書は，自己および他者からの疎外を防ぐ役割を果すともいう。

要するに，サリバンの場合，精神療法の一助として本が果す役割を次のように考えているように思われる。治療者が患者に対するとき，治療者とかなり打ちとけて，警戒心がなくなり，その間に距離をおくことがなくなり，心の中のことを全て自由に話すような段階にきた時，その並列的ゆがみがでてきて，治療者をゆがめてみるような状況がでてくる。こういう状況下では実際三人の人物がいることになる。その一人は，患者が自分の行動やことばを向ける“想像上の”治療者（フロイド流にいえば転移によってゆがめられたイメージ）であり，もう一人は，この“想像上の”第三者に反応している患者であり，さらにもう一人は，当の患者が反応しているこのイマーゴ（imago）が，どのようなものであるかについて観察し手掛りを得ようと努力している治療者である。この組み合せの中で，図書中の人物の果す役割は，“想像上の治療者”，すなわち自分が，並列的ゆがみを着せてみる対象となる。そして図書館員がこの場合治療者の役割を果すことになる。そして患者が，当の図書を読んで述べる感想や，人物評の中から，その患者の反応しているイマーゴがどんなものであるかを探り出し，話し合いでそのゆがみを是正してゆくという公式である。もちろん，図式的な表現で，具体的な事例をサリバンはあげていないので，詳細はわからない。

また精神分析派のエリクソン（Erikson）の研究にもとずいてカウフマンとテイラー（Kaufman and Taylor）は，読書の治療効果について次のような考えを述べている。文学作品によってその作者は読者の中に葛藤を創造し，これを解決させていく。読者は自分自身がいままでもっていた葛藤をそれによって解決する。そしてフィクションは，一種の人工的神経症（artificial neurosis）の役を果すという。エリクソンはたしかに神経症の治療法として，神経症患者に催眠術的にひきおこしたもう一つの神経症を解決させることによって治すことを主張している。面白い見解である。

以上の所説を基盤にもつことによって，一般に指摘されている次のような心的メカニズムが生きてくる。たとえばキャロル（Dewey Carroll）は，

1. 同一視（identification），除反応（abreaction）
2. 読書によってうる知的理解と情動的経験で自分自身のパーソナリティーを統合させ，自己洞察を得る。
3. 本能的衝動の代理表現，昇華。

またシュローデス（Caroline Shrodes）は次の三つをあげている。

1.同一視（投射，投入を含む）

2.カタルシス（除反応と同義に使用している）

3.洞察（insight)……動機づけを情動的に知る。

たしかに以上のような心理メカニズムをあげれば，それでもう問題が片づいたように思われてしまう。しかしカタルシスや同一視の意味をもう少し掘り下げてみる必要はあるまいか。次に現代のすぐれた作家アーサー・ケストラーの見解を見てみたい。

カタルシスと同一視

読書療法については，精神医学者，心理学の中にも，その意義を十分認めながら，臨床の場にこれを利用して，そこから独自の理論を検証するという段階にはまだ至っていない。上述のサリバンやエリクソンなども一つの方向や示唆を与えたに止まっている。ここで喜劇・悲劇による感動の意味をケストラーの所説によって考えよう。

まず喜劇について。さて簡単な語呂合せ（pun）や皮肉な酒落の面白さはどこからくるのであろうか。これをケストラーは，二重連想（bisociation）という新語で説明する。いずれも一つのことばによって別々に二つのことが連想される。このある一つの事象に，習慣的には矛盾する二つの心理組織のわく組が，突然二重連想を起す。これが喜劇に欠くことのできない必須条件である。バナナの皮を踏んでころぶ人のユーモア，これはベルグソン理論のあげるところであるが，この喜劇的な格好，もし見る人の心の中で，攻撃的な悪意が同情的な**同一化**に変ると，そのすべった人は憐れな人に変ってしまう。ドンキホーテについてもそうだ。崇高なものが物笑いの種になるのは，ほんの一足とびである。

さて，喜劇と悲劇，それぞれ固有の反射は笑いと，泣くことである。前者は突然の爆発，後者は緩慢なカタルシスである。この爆発とカタルシスについてケストラーの考えは興味深い。笑いのダイナミックスを見るに，笑いの場合，上述のように，人間の思考は一つの連想的文脈ないしわく組から，突如別の文脈ないし，わく組へ組みかえが起る。このためこの時，何が起るかというに，思考の場合，すなわちイデー化（ideation）の方のわく組の飛躍，組替えは簡単であるのに，感情の組みかえは容易ではない。そこでありあまったエネルギーがどっと爆発することになるという。これは立派な心理学的立論であると思う。一方泣く方は，感情をやわらげる放出反射である。泣くときに放出される情動は，餓え・激怒・恐怖の場合と違って，急劇な身体運動が欠けている。筋肉は無活動，カタルシスに向う。極端な場合は恍惚様，あるいはこん睡状態を呈する。これに似た情動は音楽に耳を傾けるとき，壮大な景色を眺めるとき，すぐれた俳優の演技を見守るとき，愛しあっているとき，神の恩寵に浴している状態にみられるという。フロイドのいう太洋的感情（oceanic feeling）であって，自我は大量の水中に分解する塩のようなものである。この時に感ぜられる共通分母的なものとして，ケストラーは関与の感情（participation）とよび，これは同一化ないし所属の感情とよんでもよいという。自我は全体の一部として経験され，この全体は人類であったり，自然であることもある。ケストラーはこれを，“自我超越的感情”とよんでいる。一方，これと区別して餓えや，怒り，恐怖の場合には，自我が表に出て，自我が自己充足的単位として経験されるゆえ，自我―主張的感情と名づけている。しかも以上二つの感情はいづれも一方だけという極端は少く，多少混り合っている。これをフロイドのようにアンビバレンツ（両面価値）といってしまうのは余りに簡単である。

ケストラーはさらに，喜劇に対応するものとして戯曲にみられる幻想をあげている。幻想とは，現実と想像という二つの世界が心の中に同時に存在し，相互に作用し合う状態である。幻想は自己超越性を喚起し，自己―主張的情動を抑制するか，もしくは中和してしまう。幻によって恐怖と怒りをよび起す場合でも，これらの感情は，自分と英雄とを同一視することからくる代償情動があって，この同一視自体，自己超越的行為である。

いま，読者ないし観客に同一視ないし，カタルシスを起させるドラマ・小説を考えてみよう。話すすじは，場

面ないし人物によって運ばれる。場面の展開を考えてみると，焦点となる場面の中に生ずる二つの独立した因果のくさりのもつれが，葛藤ないし和合，誤解をつくりだす。そしてこれが，悲・喜劇の生れるもととなる。次に人物が問題となるケースでは，その葛藤が矛盾する気質の間，ないし価値の違い，あるいは異なる行動習慣の間に生れる。しかもこの葛藤が一人物の中，あるいは別々の人の中でか，英雄と社会との間で闘いぬかれることになる。これを読むものは心の中の衝突へ導かれる。しかも二つの同時的自己同一視，相矛盾する自己同一視の間の衝突として内面化される。

このように文学作品やドラマに接することによって，読者は日常経験のわくをより大きな感情可能性のわくに二重連想で結びつけてくれる。これはカタルシスを容易にする処置，あるいは感情の流れを大地にアース（接地）する処置ともいえる。同時にありふれた経験が，別のわく別の分脈に移されるゆえ，そのありふれた経験が新しい，未知の光の中であらわになってくるように見えるのである。以上，簡単な叙述ではあるが，カタルシスというすでに自明の説明概念のもつ広い意味が多少うかがえるのではないかと思う。この問題は，とくに青年期や，成人の読書治療という問題を論ずるとき，文学における感動形式の意味などとともにあらためて問題にすべきことがらであろう。ここでは次に，比較的感動様式の素朴な子どもの読書ガイダンスの問題にうつりたい。まだ実際面の仕事が前述のサリバンの説をどれほど裏付けてくれるか，なかなか難しい問題であるが，何かの示唆を与えてくれるものと思う。

子どもにたいする読書ガイダンス

小学校図書館のライブラリアンである Hutcherson の発表によってみてみよう。

子どもが心的障害を起す原因としては，子どもの不安定感，劣等感，それに自分についての恐怖，環境についての恐怖がもとにあって，これが軽減されないと，慢性の，望ましくないパーソナリティー特性に発展し，ときに心的，情動的疾患にまで発展するものとみている。

これを防ぐためには，教育の主要目標として，健善（wholsome）で，自信のある（self-confident）自尊心をもった（self-respecting），有能で，満足そうなパーソナリティーの建設をあげている。これがため，教師とライブラリアンは，子どもに必要な図書を選択し，ガイダンスを与える道を探し求めているのだという。

たしかに作家ヴァージニア・ウルフのことばをかりるまでもなく，“幼年時代の印象は，もっとも永続的，かつもっとも生涯を深くつらぬく印象”であることに間違いない。幼年時代の読書材の与え方はきわめて重要な意味をもっている。その方法として，子どもの発達要求にあった物語を選んで，その物語りの中に出てくる人物について，集団討議（group discussion）を行わせ，なぜその人物が，そのような態度に出，そのように反応するかを論じ合うとともに，その物語りの中に，どんな社会的価値（social values）が見出されるかを話し合うようにする。ここで，これら社会的価値の意味をあきらかにして（defining）いくということが重要な課題となる。

しかも子どもの場合，やはり子ども自身の問題に類似の問題，状況場面に直面した人物がその物語に出てきて，その人物との同一視による問題解決を通して，心的・情動的治療ができるものとみている。しかも適応ということが一般に強調されるけれども人間的成長（personal growth）をぬきにして適応は考えられない。

しかし本を与えるといっても，やはりその子どもが，自由に利用できるように，どんな本を置いておいてやるかがきわめて大事なことになる。そして本は，その子どもの特定の要求を満足させうる度合いに応じて，個人の助けとなるものである。したがって，ここでも，“the right book for the right child at the right time”という原則が支配している。

子どもが本を読む過程を考えてみるに，子どもは単に目だけによって字面を追っているのではなく，今までに得たその子どもにとってありったけの知識の貯え（store of knowledge）を総動員して読んでいるのである。そし

て自分自身の要求や問題をその読書経験の中へもってきて，そこにあらわれる人物の中に自分自身を読み込み，しかも，その同一視された自分を，他人が自分をみているように，いわゆる他人の目で自分自身をも見ることができる。すなわち，子どもは作中人物という鏡に自分を映してみて，mirror image として自分の弱点も直視することができる。しかも物語りの中ゆえ，直接自分の自我は危険におびやかされることはない。いわゆる代理経験（vicarious experience）を行うことができるのである。

Hutcherson は子どもの要求（needs）を次の五種類に分けて，これらそれぞれの要求に合うよう，小学校の段階でうまく利用した本の名前をあげている。

1. 情動的安全の要求（emotional security）

子どもはなにより愛し愛されることを求めている。人間関係をはじめて習うのは家庭である。しかもまず母親との間である。情動的安全が確保され，不安のない家庭の雰囲気には，自ずと信頼感・誠実さが育ち，さらに子ども心にも不屈の精神（fortitude）やユーモアの心さえ芽生える。家族間にいがみ合い，敵対の気持があるときには，うたぐり深い態度や，交戦的（belligerent）態度が支配的となり，子どもの安全追求の要求は拒否され，重大なハンディキャップをもつことになる。

このような要求にあった本として Launa Bannon 著の**ハワイの贈物**（The Gift of Hawaii）という本をあげている。その内容は幼いハワイの少年の物語りである。この少年は母親の誕生日に何かすばらしい贈物を買ってあげたいと思っている。しかも自分のもっているお金は，たった数ペニーしかない。お店へ行っても思うものは売ってもらえない。がっかりしてしまう。そこで彼はあることを思いついた。お母さんに美しい野花で，レイ（lei）をつくってお母ささんの首にかけてあげることを思い立った。母親はこの子どもの手作りのレイを身につけて，誇らしく，“これは，私がいままでに得た最大の贈物です”，“小さい花のこの全てが大きなアロハ（aloha＝love）に満ちています。”とよろこびを伝える。この物語りによって，子どもは愛の本質が何であるかを，おぼろげながら認識するに至る。

2. 仲間から受け入れてもらいたい要求（being accepted by peers）

子どもの，同じような仲間，グループから受け入れてもらいたい，そのグループに所属したいという要求は，上述の安全要求と密接に結びついている。

3. 物質的安全の要求（material security）

物質への願望，あるいは経済的安全への願望のみたされることが，子どもにとって重要なことはいうまでもない。次の問題になるのは，精神的安全の要求である。

4. 精神的安全の要求（spiritual security）

子どもには，ある程度の物質的な安全とともに，価値とか道徳的目的の感覚が必要である。これによって精神的安全が保たれ，いっそう寛容な性格を育て，生活上の多少の動揺，浮き沈みにあっても，これに抵抗し，乗りきっていくことができ，ものごとに処して確かな判断が下せるようになる。やはり子どもには，子どもなりの人生における方向なり，目的なりが自覚されておるべきで，この安全が失われると，子どもは混乱し，時に反社会的・自己中心的で，不安定な状態におかれることになる。価値を示し，行動の道しるべとなるような本が望ましい。

ここでは Jean Merill の**最高の馬**（Superative Horse）をあげている。これは子どもの心に，人生におぼろげながら道のあることを照らしだしてくれるような話をもっている。例えばすぐれた馬は，単にその色合い・血統・体格だけできまるものでないとして，ハン・カンという子どもは，自分の黒い種馬の立派さを示すため，皇帝の馬小屋からすぐれた強い馬を選んできて競争させる。劣った馬を相手にすることは何の名誉にもならぬ。優れた馬はつねにすぐれた馬を相手として，たえず向上していくものであることを示す。

また“Christmas Tree Forest”という本もあげられている。これはクリスマスの季節向きの物語によいとしている。インジという子ども，自分のちんばの妹に，な

んとかたのしい幸福なクリスマスを迎えさしてやりたいと，そのことばかり願っている。そしてこの自分のためではなく，他の人のためにと念じている子どもだけに，サンタクロースのおじいさんは贈物を授けて下さるのである。他のものはだれも見出せないのに，このインジだけがクリスマス・トリーの森で贈物を見つけるという話である。ここには非利己的な態度の尊さが示されている。

また改作ものではあるが，Barbara Cooney の**小さな手品師** (The Little Juggler) があげられている。この手品師の仕事は，人の目をうまくごまかすことであって，このだますこと以外どんなこともできない。しかしこの自分にできるベストをつくすことが，幼児キリストや聖母に対する，他のいかなる見かけ上の立派な贈物より尊いものであることに気づく，という物語りである。

5. 身体的ハンディキャップ (physical handicap)

これは，十分注意をはらって本を与えなければならない問題である。かならずしも，すべての子どもが，この身体的ハンディを克服して，健康で丈夫にはなり得ない。自分にあわれみを感じないようにし，忍耐と辛抱を学ばせることは難しいことである。ここでは，強い精神と強い身体をつくるのに何年もの忍耐を経て努力した Theodre Roosevelt の伝記をあげている。

また盲学校の校長である Miss Choe は，伝記ものとして**くじけなかった優勝者たち** (Champions by Setback by David K. Boynick) を読書治療用リストの中にあげている。これはアメリカ各地および社会のいろんな階層出身の8人の競技者が，自分たちのハンディキャップを克服して偉大な選手に育てあげていく過程を教えてくれる。"Champion in Darkness" では第二次大戦で傷ついた戦士が，盲人ゴルフの選手権保持者になる物語りである。

こうした読みものは，たしかにその中に，自分の写し (counterpart) を見出し，自分もその問題解決の糸口を発見できるようになる点で，読書の効果は大きい。すでに半世紀も前，有名な精神医学者 P. ジャネは，読書治療のすぐれた効果について，ジョン・スチュアート・ミルが，ひどいうつ状態に落ちいっていた時，全く人生につかれ，自殺を企図し，もうとても一年とはもたないと考えていた矢先，Marmontel の**思い出** (Memories) を読み，その著者が，父親の死に合い，いかに家族が失望し，苦しんだかを知り，突然ミルは生きる勇気を得たと述べていることに接し，読みものの指示 (reading assignement) の必要を痛感している。

いずれにしても，今後この読書療法の重要性を叫ぶとともに，その実践を通しての理論の建設にはげみたいものである。

参　考　書

Hary Stack Sullivan: Conceptions of Modern Psychiatry 1940.: The Interpersonal Theory of Psychiatry 1953.: The Psychic Interview 1954.

Evalene P. Jaxkson: Bibliotherapy and Reading Guidance; A Tentative Approach to Theory. 1960.

Hutcherson: Books That Help Children: A Discussion of Bibliotherapy. Library Journal. May. 1963.

Arthur Koestler: Some Aspects of Creative Process. 1961.

精神医学における読書療法*

野間教育研究所
阪本敬彦**
高木和子

人に，「この本はいいから読みなさい。」といってすすめることは，昔から経験的に行われている。また，精神異常の患者に対する処方として，本を与えることも経験的に行われてきた。(30) それが，経験的段階からさらに進んで，書物の性格を分類し，読書療法のための図書目録が作られるようになったのは今世紀に入ってからのことである。(7,15,31,38,54,56,58)

読書療法に関する研究は，精神医学，特に病院とか診療所などの実践的分野でなされたものが多い。これらの研究論文の内容は，日常の病院図書館の運営面についてのこと(6)から，精神異常の患者に読書をさせてみた結果の報告のような実験的なもの(2,16,24)まで，広範にわたっている。ところが，あまりにも内容や原理が変化に富みすぎていて therapy（治療）の要素がぼやけてしまっている感がある。

要するに，読書療法は，精神医学の治療面における1つの重要な手段として存在してはいるが，その理論面にも実践面にも，明確な基本的原理が確立されていないのである。こういった基本的原理の確立は，読書行動の完全なる理解なくしてはのぞめない。そこで本稿では，読書行動の決定因，読書の行動に及ぼす影響，読書療法の実践の3つの側面について，それらを取扱った諸研究を展望してみよう。

1. 読書行動の決定因

個人の読書行動を決定したり，読書行動に影響を与えたりする要因としては，その原因別に考えると，次の2つに分けられる。

(1) 個人的要因——個人の心理・生理的状態とか，知能，教育程度，過去の読書習慣，社会的背景，性別，年令など，個人的属性による要因。

(2) 読書材料又は読書環境の要因——読書材料—書物の物理的条件，内容など，および読む環境による要因。

以下，この2つの要因別に考察を進める。

（1） 個人的要因について

Mower (45) は，ある病院で，入院中の精神異常の患者と病院の職員とで読書や趣味の傾向にちがいがあるかどうか比較したが，有意な差は見出せなかった。しかし，患者の方は，あまり興味を示さず消極的であった。彼の説によれば，心的エネルギーがどのくらい自由に活用できるかということが，読書や趣味を発達させるのに決定的な要因となる。従って，注意や関心，エネルギーが病気そのものに集中してしまっている患者は，読書がどんなに潜在的効果をもっているものであっても，読書することはできない。

精神医学の治療の問題を展望した中で，Appel (2) は，神経症患者のほとんどは，神経症固有の心的障害のために読むことができないのだと述べている。一方，Lazarsfeld (34) は，読書行動の決定因としての年令の要因を研究した。その中で，読み手は，自分の年令に近い年の登場人物が出てくるような話を好むことを見出した。この他，患者の性別，国民性，社会経済的水準，職業なども読書行動に影響する要因であると述べている者もある。(10,43,54)

---

* Bibliotherapy in Psychiatry.

** SAKAMOTO, Takahiko and TAKAGI, Kazuko (Noma Institute of Educational Research)

Menninger (41,42) は，読書療法を行なう人は，読書が個人的なものであること，つまり正確にいえば，ある２人にとって同じ本が全く同じ意味をもつということはありえないし，同一読者についても，その本を読む時々によってまた別の意味をもつようになるものであることを，よく知っておく必要がある，と主張した。

読書療法に関する研究の多くは，読書行動の無意識の決定因ということを考慮に入れていない。しかしながら，治療とは患者の意識的興味に適合させるだけではなく，彼の無意識的興味にも合わせていくべきだと主張する者もある。そうなってこそ，書物のもっている象徴的意味を適確に照合しえるという。(39,41,43) 精神分析学者は，大なり小なり，読書に固有の普遍的な無意識の要因というものがあると仮定してきた。Stracey (57) は，本の内容とは別に，読むという行動それ自体に読者に満足を与える特殊な要素があるのだと主張した。彼によると，この特殊な満足というのは，本質的には口唇愛的なものであるが，窃視症的，肛門愛的傾向も含まれる。そして，リビドーの分配の個人差が，書物の選択や読書の様式に影響するのである。

読書によって得られる本能的満足の例としては，Finichel (18) が，読書と肛門愛との関係を説明した中で，トイレにすわると，よく本を読みたくなるということを引用している。これは，無意識のうちに貯えられた物質を失うのを代償するために，読書によって別の物質をとりもどそうとする欲求である，と説明している。そして，食べながら本を読みたいという衝動は，口唇愛的興奮に注意をむけさせないようにするためである。読書は「せんさく好き」と結びついており，これが暴飲暴食にとってかわるのだという。

趣味活動の研究をしている Mower (45) は，口唇的性格の人は，他の性格の人よりも，趣味として読書を好むものが多いと報告している。

読書は，エデイプス的葛藤緊張を象徴化や転移といった心理的メカニズムを通じて表現するものだともいえる。

Strachey は，書物や紙は，無意識には女性又は母親の象徴として受け入れられ，書かれたコトバや作者の思想は，男性の象徴として受け入れらるという。この立場から見ると，読書とは，読者の父親に対する口唇的な，敵意にみちた，破壊的感情の表現であり，また彼の女性受容願望の表現である。飢えた読者は，書物（母親の象徴）へ入りこむ，と同時に，コトバ（父親の象徴）を読む（むさぼり食う）。そしてそうすることにより，自分自身を満足させ豊かにして行く。Finichel (17) によると，窃視症的衝動が又読書を利用している，ということもある。彼の患者で子供の時に絵本恐怖症にかかった者があった。その患者は，一度その本に対する恐怖感がとりのぞかれてしまうと，窃視症的衝動が，本を何から何まで知りつくしたいという過代償的なかたちであらわれた。

このように，読書の個人的要因を考えるのに，精神分析的見方も重要なもの一つであるとする者もかなり多い。

（2） 読書材料，読書環境の要因について

この中は，さらに次の２つの問題に分けて考えられる。

（a） 読書材料（書物）の主題・内容に関するもの

（b） 読書材料の物理的適性・構造に関するもの

書物の内容を任意に分類して，患者がそのうちのどれを好んでいるかを調べる，といった方法での研究は多い。(23,36,49,50) これらの研究の方法は，患者の精神医学的診断の水準と，彼の好んで読んでいる本の便宜的カテゴリー（例えばフィクション，ノン・フィクション，伝記，科学，旅行記といった）との関係づけをしようとするものである。すなわち，正常人の読書と患者の読書を比較したり，異った診断を受けたもの同志の読書を比較してみたりする方法である。このような方法をとった研究結果をいくつかあげると，Pomeroy (49) は，入院している精神異常者には，フィクションが好まれると報告し，Lind (37) はその反対であるといった。Mayden (40) は，ノン・フィクションは，入院している精神異常患者に

好まれるが，だんだん回復に向っている患者の間では，フィクションが徐々に人気を得てくると述べた。さらに，McFarland (39) は再び，患者にはフィクションが好まれると報告した。

このように，研究によっては相反する結果がでてくるのは，書物の性格の分類にあたって，各人がそれぞれ任意に分類したということがもたらす，当然の結果だといえよう。

次に，書物選択の決定因として，書物の物理的特性を扱った論文について概観してみよう。

Lind (37) は，患者が本を選ぶ時，その選択基礎となっているのは，本の表紙の色と棚の上の位置であるとし，Fleming (20) は，ジャケットの魅力が意味を持つと主張した。McFarland (39) は，書物の構造が読者の心理的反応をひき出しうることの重要性を強調した。書物の大きさ，型，色，重さといった要因が，ある1冊の本を選ぶか選ばないかを動機づけ，その決定に影響するようなむすびつきができる。同様に，本の位置とか，物理的環境における他の本や他の物体との関係も，潜在的には，読者の注意をひいたり，ひかなかったりし，それによってその本の選択が促進されたり，阻害されたりするという点で影響を及ぼしている。

読書行動に影響を及ぼす要因のうち，環境的要因というのは，次のようないろいろな要素も全て含むような個人の全環境をいうのである。すなわち，読書をする場所，そこにいる人間，それらと読者との関係，読書中の物理的・感情的場などの全てを含むのである。

Pomeroy (48) は，精神異常者の読書には，病院図書館の雰囲気が大きな影響をもつことを指摘し，Davie (14) は，患者がとても快適な読書ができるように設備されている Menninger Foundation Library の物理的特性はいかなるものかを詳細に報告している。

「読書とは，読者と他の人との過去と現在の関係の関数である。」ということは，読書行動と読書療法とを理解する上に重要なことである。Strachey (57) は，次のようにいっている。「読むということは，子供が体系的に教えられる，はじめての知的活動である。そして，破綻なく子供に読みを教えることができるということは，現代の教育者の誇りになっている。」

読みを学ぶことは楽しいことだと思わせることのできる教師は，読書を親しみやすい，楽しいものとするのに一役買っている。患者の読書行動範囲の中にいる人々，図書館員，病室の職員，セラピストなども又，患者の読書活動に対する態度に影響を及ぼしている。読書の好きなサイコセラピストは，そうでない者よりも患者の治療的読書に大きな影響を与える。又，セラピストが推せんした本は，そのセラピストが患者の心の中でどんな位置を占めているかによって，受け入れられ方が異ってくる。

いかなるセラピーにおいても，転移という現象は非常に重要なものである。(21)

読書療法を熱心にやっているセラピストは，自分の患者がよい方に転移をおこしている時は，悪い方にむかっている時や，葛藤場面にいる時よりもずっと従順になることに気がつく。Fenichel (18) は，転移による回復のメカニズムは，教育者が教育に成功するメカニズムと全く同一のものであろうと述べた。転移反応の一部として，患者は，読書も含む自分自身の行動を，セラピストによって潜在的に与えられた賞であるか，又は，セラピストから加えられた罰であると考える。

そういった意味では，患者は，自分のセラピストを喜こばすために読書するのかも知れないし，反対に，彼を不快にするために読書するのかも知れない。患者は，本の中に，セラピストと競争し，打ち勝つ方法を求め，その結果として自分自身の状態を打破する方向にむかう。それ故に，セラピストが転移に反対するような態度を示すと，それが患者の読書行動に影響する。セラピストの中には，患者が読書で知識を得ると，患者の競争意識が自分の治療活動の効果以外のものを生み出したと感じて，無意識に，患者が自分自身で読書することを妨げたり，軽んじたりする者もある。

読書療法は，セラピストが，無意識の拒否の態度を表

わしながら行なわれる誘導的手段である。すなわち，患者が読書療法を受けることによって，どこかに自らの答を見出せるようにしてやる手段なのである。(19)

同じように，患者に書物を与えてやる図書館員などの人々は，患者がどんなふうに本を扱い，それについてどんな討論をするかをよく見きわめ，そういった面から，患者の読書に対する動機を促進したり妨害したりできる。扱い方や，与えられ方が不適当だった本は，患者の心の中に拒否の印象を残す。(39)

本の与え方の影響力は，病院や病院図書館の制限や規則に関係してくる。患者が自分自身で書物を選べるという自由は，彼が図書館を容易に利用できればできる程，治療に効果がある。患者が利用できる本の種類や冊数を制限することは，彼らの自由をさまたげ，患者が読書から得る満足を制限し，ひいては，読書からはなれていく原因にさえなっているかもしれない。(39,40)

2. 読書の行動に及ぼす影響

読書療法の一番根本的な仮定は，読書は人間の行動に影響を与えうるものだということである。この仮定は，常識的には証明を必要としないほど当然のことと思われている。多くの文明人は，読書によって読後の行動様式が変化した経験をもっている。しかし，読書が人間の行動に影響を与えるというこの仮定は，心理学的理論や，科学的方法論においては，明確に立証しえていない。現状では，もし，ある書物が大衆の行動に絶大なる効果をもったとしても，それが真にその書物を読んだことによる効果であるかどうかを確めることさえもできないのである。

たとえば，ストウ夫人が「アンクル・トムズ・ケビン」を発表した後，アメリカでは奴隷開放の一大大衆運動がおこった。しかし，その運動は，ほんとうにストウ夫人の本によってひきおこされたものなのか，それとも，ストウの本が一つのきっかけになっただけなのか，それともまた，ストウ夫人の小説自体がそういった時代の前兆だったのか，を考えてみると，どれとも決められない。また，犯罪を扱ったマンガを子供達に与えるのはよくない。けれど，そのマンガ自体が，子ども達を犯罪に導くのか，そのマンガを読むことが，すでに子どもの心の中に存在していた反応の型を刺激したにすぎないのかもわからないのである。このように考えてくると，読書療法によって回復した患者達も，ほんとうに読書療法の効果があってなおったのか，それとも，読むという行動自体が，患者が回復にむかう行動変容の一つのあらわれにすぎないのか，どちらとも決めかねるのである。

一方，読書療法は理論的に有効であるとする論証も，広告，宣伝，教育等の分野で演繹的に述べられてはいる。(11) いずれにせよ，「読む」ということは教育をする上にも，社会的コミュニケーションをする上にも，必要不可欠な条件であることだけは確かである。

前節では，読書がどのようにして読者の欲求を満足させるか，すなわち，個人内のある欲求が，読書を動機づけ，読書によって何らかの内的満足が達成されるといったことを扱った論文を展望してきた。(18,43,45,57) それらの論文では，読書によって楽しみや情報を得る，レクリエーションのための読書といった表面的満足についてとりあげたものが多かった。(2,11,41) これらの論文で，ほぼ一致していっていることは，適当な条件下での読書は，読者の心理生理的緊張をやわらげ，快楽を感じさせるという点であった。ここでいう快楽とは，読書によって得た知識を人に教える時に，自分の認識が完成したように感ずる，といったたぐいの，読書行動に伴って感じ，経験するものである。

読書によって読者が得るものを考えてみよう。まず，読書することによって，読者は一時的に個人的葛藤から逃避することができるし，自分を登場人物と同一視することによって，社会的経験を増すことができ，書物に象徴されていることと，社会的行動との一致をみとめることによって，意識的・無意識的に満足し，自分を著者や登場人物と同一視することによって，いながらにして現実を改革したり，社会を是認したりでき，読書の中で，自分の行動の指針や，問題解決の手法を学び，同一視の

メカニズムを通じて，自分のモラルや倫理観や目標を修正したりする，などといったことがあげられる。

Mayden (40) は，読書によって自分の欲求を満足させるということに関しては，精神異常者と正常者とで何らかわるところがないことを見出し，読書療法というコトバに疑問をなげかけた。彼は，入院している精神異常者にとって，読み物の選択や拒否の自由が特別重要な意味をもつのは，彼らが入院しているということ自体ですでに自由を制限されているからであると主張した。

Allen (1) は，読書によって無意識に欲求を満足させている患者について述べた。その患者は，本を終りまで読みおえると，その本について痛烈な批判を加えた。しかし，その患者の態度と夢を分析した結果，一番ひどく批判されているものが，患者が無意識に一番楽しんでいるものなのだということがわかった。読書療法は，口唇愛的欲求や，窃視症や，肛門愛的傾向を満足させ，昇華させるのに役立っている。彼は又，読書療法が，攻撃的緊張の昇華に役立っているある婦人の例を引用している。彼女は，治療中に次のようにいった。「時々，私は夫を殺したくなる。そんな時，私はその代りに探偵小説を読むんです。」

Strachey (57) は，全ての現代人が読書に親しむようになれば，人間の持っているサディスティックな要素を昇華させる機会が多くなるので，人間の中にむきだしのまま残っている残忍性を，少しでも縮少することができると述べている。この意見は，漫画・映画・テレビ・ラジオ等での犯罪・暴力・サディズムは，子どもに残忍性を模倣させるものだという Wertham (59) の考えとは正反対のものである。

Glover (25) の主張を Fenichel は次のようにまとめている。多くの心理療法の効果は，患者の症状に人為的代償を与えるようにしむけた結果あらわれるものである。そう考えると，患者が回復するかどうかは，次の三点にかかっている。

（a） 人為的代償が，患者の心理・力動的構造とうまく適合するかどうか。

（b） 代償が，ひそかなセックスをもったり権力をもったりすることで，楽しみうるものかどうか。

（c） 代償が，患者の症状の派生物か何かのように思われないほど，患者のはじめの症状から十分に転換できるかどうか。

読書療法は，Appel (2) と Allen (1) の二人によって，患者の行動を外へ転換することを可能にする方法として，推進されてきたのである。多くの精神異常者のもっている自己中心性は，自己強化の傾向を有し，それがために病気を長びかせる結果になっているのである。読書は，自分以外の物への興味を刺激するので，こうした悪循環を打破するのに役立つのである。

Banyai (5) は，結核入院患者にとって，読書療法は，読書によって病院外の世界，正常者とのつながりをもたせ，生活に適応しやすくさせるものであると述べている。Gardner (24) や Menninger (43) も，精神異常者を治療するのに，読書療法を用いた例を報告している。

患者の社会性を増大させ，グループ活動を活発にさせる手段として読書療法を利用した例はいくつか報告されている。Bursinger & Kenyon (12) は，Tomah の Veteran's Administration Hospital で行ったグループによる読書療法について報告した。早発性痴呆症の患者にグループ療法をする時には，声を出して本を読ませ，読んだ本について皆で話し合うようにさせた。他の患者の読書グループでは，読んだ作品の概要を話し，その本について皆で話し合うという形式がとられた。Mannigan (28) も Northport の Veteran's Administration Hospital における同様なグループ療法のプログラムを報告した。この病院では，受け持ちの精神医の監督の下で図書館員によってセラピーが行なわれている。Blackman (8) は，早発性痴呆症患者のグループ治療について述べ，Grossman (26) は，患者が図書館を活発に利用できるようにするためのグループ療法を行った。Lerzell (35) は，精神異常者に本を読んでやることの効果について述べ，患者のグループにはどんな本が好まれるかを報告した。彼は，読書療法を，より大きい集団療法といわれる

ものとむすびつけようとした。Heath (29) は，アルコール中毒患者に，集団療法を行って成功した例を報告している。ある反抗的な患者は，アルコール中毒に関する文献を読んでからは，積極的に治療を受けるようになったのである。Schneck (52) は，集団による読書と役割演技 (role playnig) とを併用して，患者が自らの問題について，洞察を得る助けとしてやるための技法とすることを提案した。読書療法と患者のレクリエーション的，趣味的活動と結びつけることを推奨している人もある。(44, 55)

図書館という場の中で，精神異常の患者に労働経験を与えうるということもセラピーの一つの結果だとされてきた。Bursinger & Keyon (12) は，患者と図書館，図書館の中で働いている病院の職員との関係が重要だと強調した。又，本を管理するとか，貸出し，本棚の整理，貸出し期間超過のもののチェック，病院新聞へ本の紹介文を書くこと，などという病院図書館の活動は，読書療法の実践とむすびつき，療法に利用することも出来ることを報告したものもある。(6,13,32,52) 又，McFarland (39) は，患者達の親交を深めるために，ある患者が本を読んだら，その本の感想を書いて本の見開きに貼らせることをすすめている。

以上概観してきたように，読書療法の効果を報告した論文の多く，特にグループ読書に関するものは，主として，経験的に，患者が回復したとか，社会性が増大したとか健康的な仕事や遊びをするようになったという問題を扱っている。それがために，読書療法は，特別に分化した治療法というよりも，環境療法の一側面のように受けとられやすくなっている。ここでは，読書療法とは，病院における精神異常者の社会性を増大させ，興味や活動を活発にさせ，より健康的な同一視をするようにし，社会的役割を心の中でためしてみる機会を考えることを目的とした環境療法の付加的技術であるとして考えている。

又，別の意味で，書物を個人的心理療法に用いている者もある。すなわち，洞察を得ることを目的とした，説明の手段を書物の中に見出させるために本を用いた例も報告されている。Lazarsfeld (34) は，患者はセラピストよりも，その本の作者を中立的立場からながめているから，洞察というのは，セラピストから説明されて得られるものではなく，患者が読書の結果，自ら得るものであると主張した。Appel (2) も，読書療法とは，患者個人が関与している要因をとりのぞいてやることによって，患者自身が自分で洞察を得るようにしてやるものであるという。又，心理療法の個人面接中に患者がしゃべったことの中心点をつかむ手段として，読書療法を用いるとよいとすすめている者もある。Schneck (55) は，読書療法によって，患者の問題についての話し合いが刺激され，彼が葛藤をひきおこしている原因は何かという内容をたくさん聞き出すことができた例をあげている。Lazarsfeld (34) は，そういった内容は，患者に，読書の好みとか，読んでいる本の中で誰を自分と同一視しているかなどをたずねている時に一番よくひき出せると述べている。Kircher (33) は，行動異常の子どもに読書をさせた結果，同一視がよくなっていき，治療中の反応も変ってきたと報告している。

Baker (3) は，読書療法は，模倣と同一視のメカニズムの関数である，という理論に固執する人々に対して忠告して，次のように述べている。慢性的病気や身体障害の患者が書いた個人経験の本は，非現実的同一視をすることによって，フラストレーションがこうじた反応や病気をもつ読者には達成することのできないような目標をもたせる結果になってしまう。

3. 読書療法の実践

精神医学の実践場面における読書療法は，個人的心理療法，(14,28) 病院精神医学，(14,28) 小児精神医学，(9,33) 夫婦生活のカウンセリング (46) といった分野で行われてきた。

Appel (2) は，心理療法をする場合，読書療法を併用した者の方が，そうでない者よりも，効果がより速くあらわれることを見出した。読書療法は又，個人面接や，

退院後のセラピーにおける医者（セラピスト）と患者との関係を維持しておく手段にもなっている。(2,55)

患者に心理療法を行っていて，適当な時期に読書療法を併用するのが，一番よい方法だと考えられる。では，その適当な時期とはどんな時であろうか。患者が，自分から進んで書物を読みたがった時は，たしかに読書療法を行うのによい時期であるといえる。そうした欲求を患者が持ったということは，彼がすでに読書によって満足を得られるようになっており，そのために読書することが動機づけられたのだということを示しているからである。しかしながら，読書することに動機づけられてはいても，何らかの理由で，本を読みたいといわない患者もいるし，読書によって良い効果が期待できるとわかっている患者でも，セラピストとか他の環境の要因によって動機づけられなければ読まない者もいる。患者に，いつ読書をすすめるか，どんな書物を，どのようにしてすすめるか，をきめる時には，常に個々の患者の心理状態を考えてやることが一番大切である。(2,41,43)

ある種の患者には，ある特殊な書物がよい。たとえば，妄想型や抑圧型の患者には非人格的読み物がよい，ということを示唆している研究者もある。(24) 又，シリーズものを用意しておき，個々の患者の心理状態に応じてその中から書物をえらぶというやり方の者もある。(2) Lazarsfeld (34) などは，特にどの本をすすめるというふうにきめず，患者が前から知っていたものを用いている。

子どもの読書療法のための図書目録がのせてある論文としては，Appel (2)，Ebough (16)，Schneck (55)，Ball (4)，Hannigan (28)，Kircher (33)，Hall (27) のものがあげられる。

治療を目的として書物を与えるという方法は，たしかに，科学的とはいいえないものである。しかし，Appel (1) のいう“読書療法は，科学というより芸術といった方がよいかもしれないが，そのことが，読書療法の標準化や方法論の発達をさまたげるものとはならない。”という意見が，一番納得のいくものであろう。それでも，読書療法を理論的にしっかりしたものにしようとしている Bryan (10) や Oathout (47) のように，まだ検証されていない仮定にもとずいた原理や技術を存続させることを非難する者もある。Oathout (47) は，はっきりした知見によって，次々と仮説が体系的に検証されていくたびに，何度も何度も分類のしかたを正していくという方法で，ある患者の特殊な本に対する反応の詳細な研究をしている。Schneck (54) は，こうした研究を擁護しているが，こういう詳細な報告は価値あるものである。同じように，読書過程と読書材料がもっている無意識的要因という観点から，患者の反応を体系的に研究する必要がある。

読書療法の行動に及ぼす効果という問題についての数少ない結論的意見から見ると，セラピストが，広い心と柔軟性のある態度を持ち続けることが，セラピーを成功させるもとであるといえる。ある人のある本に対する反応を見て，その本が他の人にひきおこす感動を確実に推定することは不可能なのであるから。(40) この問題で，Bryan (10) は，不幸にして，個々の患者の心理を考えずに，セラピストの勝手な予想にもとずいて，書物の与え方を決める場合がある，ということを指摘している。書物の選択の自由を制限する方がよいということを立証するような知見は，少くとも精神異常者の読書についてはない。自分自身で本を選択する自由の価値と読書による昇華の効果との二つを考えると，読書を制限することは，害あって益なしといえよう。患者の読書の価値は，個々の患者の心理状態を理解し，それを読書と結びつけるセラピストの技術の正確さによって大きく変ってくるといえよう。

読書療法の研究的課題は，心理療法や人間関係の研究と切りはなすことはできない。それゆえ，読書療法の究極の理解や発達は，行動の変化，心理療法の過程や結果などを評価する方法や技術の開発にかかっているといえるのである。

参 考 文 献

1. Allen, E. B.: Books Help Neuropsychiatric Patients. *Library J.*, 71:1671, 1946.
2. Appel, K. E.: in *Personality and the Behavior Disorders* by J. Hunt, New York, 1944.
3. Baker, L.: Personal Experience Books. *Hospital Book Guide*, 13:32, 1952.
4. Ball, R. C.: Prescription Books. *Am. Library A. Bull.*, 145, 1945.
5. Banyai, A. L.: in *Occupational Therapy* by W. R. Dunton and S. Licht, Springfield, 1950.
6. Barber, E. M.: Library Activities in a Hospital for Neuropsychiatric Patients. *U. S. Veterans Bureau Medical Bull.*, 7:180, 1931.
7. Bishop, W. J.: Hospital Liberary and Bibliotherapy. *Library A. Rec.*, 1:198, 231, 274, 1931.
8. Blackman, N.: Experiences with a Literary Club in the Group Treatment of Schizophrenia. *Occup. Therapy*, 19:293, 1940.
9. Bradley, C. and Bosquet, E. S.: Use of Books for Psychotherapy with Children. *Am. J. Ortho psychiat.*, 6:23, 1936.
10. Bryan, A. I.: The Psychology of the Reader. *Library Journal*, 64:7, 1939.
11. Bryan, A. I.: Can There Be a Science of Bibliotherapy? *Library J.*, 64:773, 1939.
12. Bursinger, B. C. and Kenyon, X.: Neuropsychiatric Hospital Library. *Library J.*, 79:20, 1954.
13. Condell, L.: Library as a Road to Re-education in Responsibility for Neuropsychiatric Patients. *Med. Bull. Vet. Administration*, 13:77, 1936.
14. Davis, L.: The Function of a Patient's Library in a Psychiatric Hospital. *Bull. Menninger Clin.*, 4:124, 1940.
15. Delaney, S. P.: Bibliography on Bibliotherapy. *Bulletin of Bibliography*, 20:135, 1951.
16. Ebaugh, F. G.: Library Facilities for Mental Patients. *Am. Library A. Bull.*, 29:619, 1935.
17. Fenichel, O.: The Scoptophilic Instinct and Identification. *Internat. J. Psychoanaly.*, 18:6, 1937.
18. ——: *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*, New York, 1945.
19. Fierman, L. B.: *Proceedings, Area One Chief Librarians Meeting, Veterans Administration*, West, Haven. 1954.
20. Fleming, M.: Our Library Circulation. *Washington Bulletin*, 3:30, 1940.
21. Freud, S.: The Dynamics of Transference in *Collected Papers of Sigmund Freud* by E. Jones, London, 1950.
22. Gagnon, S.: Organization and Physical Set-Up of the Mental Hospital Library. *Diseases of the Nervous System*, 3:149, 1942.
23. ——: Is Reading Therapy? *Diseases of the Nervous System*, 3:206, 1942.
24. Gardner, W. P.: A Psychiatric Hospital Library. *Minnesota Library Notes and News*, 12 : 179, 1938.
25. Glover, E.: The Therapeutic Effect of Inexact Interpretation. *Internat. J. Psychoanaly.*, 12, 1931.
26. Grossman, M.: Group Therapy Program in a Neuropsychiatric Hospital. *Med. Bull. Vet. Administration*, 21:149, 1944.
27. Hall, E.: *Personal Problems of Children*, 1953, Boston.
28. Hannigan, M. C.: An Experience in Group Bibliotherapy. *Am. Library A. Bull.*, 148, 1954.
29. Heath, R. G.: Group Psychotherapy of Alcoholic Addiction. *Quart. J. Studies on Alcohol*, 5:55, 1945.

30. Henry, G. W.: *Essentials of Psychiatry*, Baltimore, 1938.

31. Jones, E. K.: *Hospital Libraries*, Chicago, 1939.

32. Jones, P.: Hospital Libraries in the State Hospitals of Minnesota. *Bull. Am. Hosp.* A., 3:433, 1929.

33. Kircher, C. J.: *Character Formation Through Books: A Bibiliography*, Washington, 1952.

34. Lazarsfeld, S.: Use of Fiction in Psychotherapy. *Am. J. Psychotherap.* 3:25, 1939.

35. Lazell, E. W.: Group Treatment of Dementia Praecox. *Psychoanalyt. Rev.*, 8:168, 1921.

36. Leslie, F.: Choice of Reading Matter by Neuropsychiatric Patients. *U. S. Vet. Administration Med. Bull.*, 7:779, 1931.

37. Lind, J. E.: The Mental Patient and the Library. *Bookman*, 65:138, 1927.

38. Macrum, A. M.: Hospital Libraries for Patients. *Library Journal*, 58:78, 1933.

39. McFarland, J. H.: A Method of Bibliotherapy. *Am. J. Occup. Therapy*, 6:66, 1952.

40. Mayden, P. M.: What Shall the Psychiatric Patient Read? *Am. J. Nursing*, 52:192, 1952.

41. Menninger, K. A.: Psychoanalytic Psychiatry. *Bull. Menninger Clin.*, 4:105, 1940.

42. Menninger, W. C.: Bibliotherapy. *Bull. Menninger Clin.*, 1:263, 1937.

43. ——: Bibliotherapy. *Ment. Hyg.*, 4:28,1938.

44. Millar, F. G.: Patients Ply Their Hobby in the Hospital Library. *Occup. Therapy*, 14:121, 1935.

45. Mower, J. W.: A Comparative Study of Hobby Activities. *Bull. Menninger Clin.*, 4, 1940.

46. Mudd, E. H. and Whitehill, J. L.: The Use and Misuse of Books in Counselling. *Parent Education*, 14:2, 1938.

47. Oathout, M. C.: Books and Mental Patients. *Library J.*, 79:405, 1954.

48. Pomeroy, E.: Veterans' Hospital Librarians Meet in Washington. *U. S. Vet. Administration Med. Bull.*, 5:637, 1929.

49. ——: Hospital Libraries, *Med. Bull. Vet. Administration*, 7:986, 1931.

50. Quint, M. D.: The Mental-Hospital Library. *Ment. Hyg.*, 28:263, 1944.

51. Rioch, D. and Stanton, A.: Milieu Therapy. *Proc. A. Res. Nerv. & Ment. Dis.*, Baltimore, 1953.

52. Schneck, J. M.: Studies in Bibliotherapy in a Neuropsychiatric Hospital. *Occupational Therapy and Rehabilitation*, 23:316, 1944.

53. ——: Bibliotherapy. *Psychiatry*, 8:207, 1945.

54. ——: A Bibliography on Bibliotherapy. *Bull. Med. Library A.*, 33:341, 1945.

55. ——: Bibliotherapy for Neuropsychiatric Patients. *Bull. Menninger Clinic*, 10:18, 1946.

56. ——: Bibliotherapy in Neuropsychiatry, in *Occu, pational Therapy* by W. R. Dunton and S. Licht Springfield, 1950.

57. Strachey, J.: Some Unconscious Factors in Reading. *Internat. J. Psychoanaly.*, 11, 1930.

58. U. S. Veterans Administration: *Bibliotherapy*. Washington, 1952.

59. Wertham, F.: *Seduction of the Innocent*, New York, 1953.

C. Shrodes の読書療法論（紹介）*

野間教育研究所
阪本　敬彦**
山中　輝子

古くから，すぐれた作家は人間の思考に影響を及ぼし，心を動かし，行動を変える力を持っていると考えられてきた。最近では，小説家や劇作家は人間の本質を深くまで見通し，しばしば科学の発見を予測するということを精神医学者や心理学者が認めている。ビブリオセラピーは，芸術家と科学者の洞察力に基づくもので，パーソナリティのダイナミックスと代理経験の本質との間に不可欠な関係があるという理論に基礎づけられている。それは，読者の感情を引きつけ，それらを意識的に生産的に使用させるような，想像力に富む文学と，読者のパーソナリティとの間のダイナミックな相互作用の過程である。

ビブリオセラピーとは

ビブリオセラピーは，文学作品の中に，読者が自分自身の姿や自分によく似た人間像を見出す時に経験する“認知のショック”によってはじまる。フロイドが言うように，熟練した作家は，非常に巧みに真実の幻影を創作する。「彼は，われわれの感情の流れを導くことが出来る。すなわち，感情がある方向に流れるのをさえぎり，他の方向に流すことが出来る。」読書においては，ある場合には著者の思想を曲解する結果となり，またある場合には理解し洞察するという結果になるのだが，この相互関係の本質は何であろうか。

読書は，すべての他の人間行動のように，全パーソナリティの一機能である。われわれが小説や劇を読む時には，われわれは仕事をし，人と会い，教え，創作し，あるいは人を愛する時と同じように，自己の欲求，目的，防御，そして価値に応じて行動しているのである。サイコセラピーの第一段階における内容と機能に平行して，読書によって引起される代理経験は，次のような過程をたどる。(1)同一化（投影と摂取）　(2)浄化　(3)洞察。読者は，彼が受容し，組織することの出来るものだけを芸術作品から取り出すであろう。従って，読者は彼の欲求を満たすような考えを摂取し，彼の自我を脅やかす考えを拒絶するであろう。いずれの場合にも，彼が経験し，感じていることが，その本の中から彼が受容することがらや，それに結びつける意味を決定する。

ビブリオセラピーは，深層療法のように，受容における循環過程を破ることによって，効果があがる。この循環過程は，自我のイメージならびに他我関係のイメージを支持する循環観念と，現実の経験とその象徴を混乱させ，その象徴に対して現実の葛藤に対すると同様な反応を行うという実際とを含んでいる。深層療法においては，治療者と患者との関係が，転移によって外的な関係体制（frame of reference）を作りあげ，それが中立と友好の雰囲気の中で患者が初期の創傷経験を再生することを可能にし，その結果として患者を解放することになる。もし，セラピーがうまくいくならば，患者は，初期の恐怖，罪悪感，憎しみと，その後の象徴的回想との相異を認めることが徐々に出来るようになる。それに関連して，彼は自分の経験および自分自身に対する新しい見通しを得，課せられた束縛から自己を解放する洞察を獲得するであろう。同じように，ビブリオセラピーは“悪

---

* “Bibliotherapy” by C. Shrodes (abstracts)

** SAKAMOTO, Takahiko & YAMANAKA, Teruko (Noma Institute of Educational Research)

い循環を破る”場面を与え，読者の意識性を広げ，彼の理解を豊かにする新しい関係体制を作りあげる。彼の経験が広げられるその程度は，引起された情緒的態度の強さによる。もし，ある登場人物が，彼の注意を強く引き止めるならば，以前の経験から代理経験への感情の転移としての同一化が効果的になされるであろう。積極的な同一化は，読者の自我意識を高める傾向があり，読者によき競争相手を与えることになろう。消極的な同一化は彼の自己のイメージをおびやかされるときに生ずるであろう。そして，自我にとって受入れがたいために抑制されていた感情を，その登場人物に投射するという形をとる。この投射を引起すことによって読書は，無意識の根源の中から，読者の感情を解放させる触媒として役立つのである。Murray は次のように指摘する。

「人の感情に反対するよりも，同盟した方がよい。困難な投射から免かれるために，人はそれらに気づかねばならない。」

経験としての文学

人生の直接的で具体的な表現である文学は，人の感情を引付け，読者に自らの経験を再生させる。そこで，読者は，“最善を尽くしてやっている”“そうなるようにきまっていた”とか，“母親は最も良く知っている”というような，人生についての単純で非現実的なきまり文句の形で表われる慣習的な経験の集合にはめ込まれるよりも，むしろ，離れた観察者としての見通しから，自らの経験を新たにながめることができる。文学の仕事において，芸術家は人間経験の混とんとした断片を体系化し，それらに意味づけをしたが，しかしその判断を押付けることはしなかった。読み手と程度の差だけが異なっている経験を叙述することが，小説，あるいは劇の本質である。それゆえに，怒り，侮辱，同情，そして理解の態度が必然的にひきおこされる。人は活動している人間の前で，無関心でいることは出来ない。幻影であると同時に真実でもある文学は，離れているということと，含まれているという幻想を読者に与える。そこで，彼は傍観者であり，関係者でもあるのである。感情の衝突の下で，彼は，彼の人生では近づき難い象徴的な世界をさまようかもしれない。彼は，空想的な情況，彼の素質，彼の生活環境や，彼独特の見方を総合し，書かれているものと関連づけることによって，彼自身の経験を再評価するようになるだろう。

一方，代理経験は読者の自己概念を非常におびやかすので，意識することを抑制させていたものを許容することが出来ないかもしれない。彼自身の生活をながめるかわりに，彼の経験をもっと現実的に評価するような新しい関係体制の中で，彼は自分の心配とか恐怖を，作者が創作した人物に投射することもあろう。このことは洞察を得るのに失敗であったように思われるが，読書治療上には価値ある手がかりをもたらす。読者の動機を理解し，彼の防御を認め，そして，それらに援助を与えることを指導者に可能ならしめる。

われわれは，代理経験の本質は，読者のパーソナリティによって決定されると考える。それゆえ，代理経験は彼の自己概念，他人に対する彼の人間関係，そして，彼の世界観の単なる反映であるかもしれない。しかし代理経験は，それらを変化させることもあろう。次に述べる例は，どのようにして，読者の自己認知が自己の尊厳を増し，彼に所属の感情を与え，そして，彼に今まで気づかなかった経験の一面を気づかせることが出来るかを示唆している。われわれは次のような事に気づくだろう。すなわち，ある人物との単純な同一化が，どのように読者の防御を強め，そして，彼の失敗を合理化するようになるか，そしてどのように，同一化は心を乱す経験を再生しなおし，彼自身と彼に密接していることを再評価させるようになるか，そしてそこで，どのように建設的な表現へのエネルギーを回復するようになるかということである。ここにあげた例は，大学生についてである。しかし，この考え方は，読書材料がちがいさえすれば，子供達や青年にもあてはまる。

同一化の事例

ある人物との同一化が起った時，それは，その人物と自分自身との類似の認識を含む。彼の読むものの中に，自分とのかかわり合いを全然感じたことがなかったある若い大学1年生は，Sheewood Anderson の Winesburg, Ohio を読んで次のような意見を述べた。

「その話は，私自身が誇張された姿で描かれているのではないかという疑惑を与えた。」

その同一化は，彼自身の動機とその人物の動機との真の類似から進んでくるので，彼の自己認知が洞察を表わす。彼の言葉づかいは，発見のショックと暗黙のいや気を示している。しかしながら，その描写が誇張されているように思われるので，認知感情は容易に受け入れられる。

もし，読者が同一化した人物が，彼の問題を写すことにおいて非現実的であったり，もし，人生への彼の適応がうまくいっていないように思えるならば，その人物についての彼自身の認知は，彼自身の生活様式の継続に強力な妨害になるかもしれない。Thurber の小説を読んで，夫の空想が彼女自身の空想と似ていることを知って驚いた Mitty 夫人のケースは，そのようなものであった。その日のほとんどを，彼女は自分や他人の運命について思いをめぐらせた。ほかの時間には，彼女の専制的な夫への絶対的な屈従に思い悩んだ。夫との強い同一化は，彼女自身の生活の中の割れ目に気づかせた。

一方，同一化は所属感を読者に与えることによって，自己の尊厳を増させるようになることがある。利発な23才の女子は，「息子と恋人」を読んだ後で，非常な驚きをもって次のように告白する。「私は，全世界の中で，所有欲があり横暴である母親を持った唯一の人間であると思っていた。」30代後半の，神経症の戦傷軍人は，彼が経験したと同じ種類の疑いや恐怖が記録されてある記事の中の人物との同一化に慰めを見出した：

「私は，私の家族には，奇妙で異常であるが満足していると思われていた。私の家族は，私を寛大に扱い，そして，私を満足させた。しかし，真の親類関係はなかった。そこで，これらの人々に関する記事を読むことは役に立つのである。Anderson が店を閉じ，商売から離れ，そして，著述することが出来るようになった事はすばらしかった……それを困難にしたのは，非常に支配的な人間であった私の兄弟であった。彼は，この世の成功は成し遂げるということが大切であるという案を受入れた……成功は，私にとってつまらないことのように思われた。私は，私がなにをしたいと望んでいたかを知る。……それは常に書くことである。しかし，それをすることは難かしかった。私の兄弟は，私に対して寛大であった。——私の父でさえも——しかし，私は，彼等が2人とも私が誤っていると思っているという感情を持った。そこで，ここにあるこの雑誌に，仲間感情を抱いたのだ。私は，私が本当に1人ぼっちでないということを前に**知っていた**。しかし，私はそのように**感じる**ことが出来なかった。どうしてだか知っていますか。人は，心ではある事を知ることが出来るが，それを感じることが出来ないのだ。これらの雑誌は，私にそれを感じさせてくれた。」

他人の人格への洞察

自己認知の他に，同一化は他人の認知という形をとるかもしれない。読者は，想像的な文学の媒介を通してはじめて，客観性をもって，彼の母親あるいは父親を見ることができよう。そのような洞察は，両親の限界や強さについて，もっと現実的な態度を生み出すだけではなく，両親への恐怖あるいは敵意の感情を伴なう心配や罪悪感からの解放をもたらすかもしれない。中国生まれのアメリカの少女は，憤慨と罪悪感を交互に感じた。なぜならば，彼女はまず最初に大学に進学することによって，第2に，彼女が愛を感じることの出来ない男性と結婚することを拒否することによって，両親に反抗したからである。彼女は，The Way of All Flesh の中の Christina と Theobald に，彼女自身の両親が彼女を怒らせたのと同じ特質を認知した。しかし，彼女はまた，

両親が Ernest の両親のように厳格でいこじであることを知覚した。この認知は，彼女に矛盾と罪悪感を持たずに学校を続けるのに必要なわきまえを与えた。

Alaxander と French は，過去の感情経験の不健全な影響を取り除くために，新しい感情経験を経ることが大切であるとする。文学の中の人物や情況との同一化は，古い動揺している葛藤を新しい解決をもって再経験させる。ある事例においては，同一化は読者を昔にもどらせ，彼自身の幼年時代を思い出させるほど強かった。研究者でもある中年の女教師は，最初「息子と恋人」は美しいと思った：

「私は，それを読む時間よりも，それについて考える時間の方が多かった。それは，私の昔の生活をたくさん思い出させた。夜中に，あるいは市街電車の中で思い出させた。思い出は，私の母や彼女の死，私に対する彼女の罰，そして，私に対する弟の軽蔑であった。」

後に，彼女はそれを読むことに耐えることが出来ないと述べ，次のような説明を示した：

「私は，決して母を愛していなかった。話したり，一緒に生活することは，おそろしいことであった。私は，彼女から離れている時には大変幸福であった。私は戻ってくると，不機嫌になり，神経が過敏になり，不愉快になった。母親の憂うつ症の呪文は，私をがっかりさせた。やはり，彼女は私を抑制した。私は彼女に対する自分の態度を恥かしく思ったので，決して自分の態度を許さなかった。私はすべての自分の生活において非常に素直で，服従的でさえあった。これが，私がその本を美しいと思ったが，それを嫌った理由である。それは，いかに多年の不幸を私が生じさせたかを私に知らせた。私は，私の母親の真のすがたを見るのが好きではなかった。彼女の死以来，私は彼女を偶像化した。しかし，今は私は，彼女がこの本の中の母親に似ていないということを知った。警戒したり，偽善的でもないし，しかし，彼女は有能で多忙で野心的であった。そして，子供達の明白な服従を信じてしつけた。私は完全な母親の像と，彼女に対する消えやらぬ憤慨とを心からぬぐいさるべきであった。」

Paul に対してもった同情は，彼女自身の罪悪感をはらし，彼女の今まで抑制されていた感情を絶滅する程強かった。彼女は，初めて彼女が母親に対して感じていた敵意を認識することが出来た。その上，彼女は，理性と同じく感情を表現することにおいて，母親との人間関係に新しい見通しを得ることが出来，そして，Paul の母親と彼女自身の母親を区別することが出来た。そうすることによって，彼女は自分を苦しめた矛盾から解放され，健全な決意をすることが感情的に出来た。

「私は完全な母親の像と，彼女に対する消えやらぬ憤慨とを心からぬぐいさるべきであった。」

教師とビブリオセラピー

われわれはビブリオセラピーの理論，および読者のパーソナリティと彼が同一化した人物の間の相互関係の実例をいくつか述べた。すなわち，読者自身の経験の再生・再評価を可能にする溶けあいについて述べた。しかしながら，ビブリオセラピーは，必ずしも洞察を生み出すとは限らないが，要求されている厳格な指導である。すべての教師が，この方向における読書計画の領域を広げる準備が出来ているのではない。読書の教師と精神病理学者の訓練と目的の間には，たくさんの明白な相異があるが，両方とも精神衛生を育成することに関係がある。そして，読書は教師が意図するしないにかかわらず，次のようなすべてのパーソナリティを含んでいる複雑な行動である。すなわち，脅迫と慰めの源であり，感情と知性の分離の動機であり，あるいは，それらの統合の動機である。それゆえに，教師が読書の力動性について認識すればするほど，学生に生活の一貫性と価値を見い出させるのを助ける一協力者として，想像力に富んだ芸術家の協力を得ることにおいて，教師はより多くの成功を得るであろう。

ほとんどの学生にとって，読書への治療的接近は，予防療法の一種として最も有益であろう。少くとも，本に興味を持たせ，本に意義を見出させることはでできよ

う。あるケースでは，反応が遅れるかもしれない。読書の時に，ただ彼を楽しませただけの本は，想像の心の貯えの一部，彼の経験した世界の一部，経験の彼の評価の標準，危険の暗示，彼の動機を理解する手がかり，真実の明瞭化になるかもしれない。他のケースでは，自己認知と受容を増させる直接的な効果や，人間関係をうまくやっていく，より大きい包容力があるかもしれない。最後に，あるケースには，価値の習得が徐々に行なわれるかもしれない。すなわち，親の忠告から，あるいは，たくさんのハリウッド提供のもろさと皮肉から，あるいは“人生書”，まばゆいばかりの広告，他のマス・メディアによって作り上げられた成功の伝説から無意識に結合された価値の獲得があるかもしれない。われわれの学生の生活を導き，そして，豊かにする価値は外部から加えられ得ないであろう。しかし，その価値は彼等が本当に誰であり，何になり，どのように他人と関係を持ってあろうかということを彼等に知らせることの出来る彼等のパーソナリティ，才能，好奇心，技術，そして，熱望の面のすべての発見から増すであろう。想像的な作家は，この結果にまで貢献することが出来る。なぜならば，彼は“人間の心は，同情と反感を通して，それ自体を知るのである”と教えることが出来るからである。

“Bibliotherapy” by Caroline Shrodes, Reading Teacher, IX, Oct. 1955, 24-29.

わが国での読書療法の研究と事例*

東京学芸大学
阪本一郎**

1. その先駆

私が「読書指導　原理と方法」(1950)を書いたとき，その中に“読書療法”にについて触れたが，それはThorpe, L. P.; The Psychology of Mental Health (1950)の中に1節を見たからであった。それは，こう書いてあった。

“この方法は，書籍・記事・パンフレットその他の読書素材を用いて，人格の再適応をはかろうとするものである。普通には，人間の行動に関する心理過程についての情報を，個人に得させる手段とされる。すなわち，このような読書は，かれの防御機制への洞察を発達させるのに役立つ上に，かれが外部にあらわす活動の主題に対して興味を起こすように仕向けられる。そのさい，個人の力学的な要求，知的な背景，および情緒的状態に注意が払われる。今日までのところでは，精神分析学の処置をうける以前の軽い精神病やアルコール患者のケースに用いて効果があるとされている。”

これを引用した上で私は“人格に不当適応があり，あるいはその兆候がみとめられる児童に対して，読書によって，それを治療することは困難ではないと思う……もっと研究してみたい。”と書いている。

これに対して，図書館学の先輩，竹林熊彦氏（当時，京都市教育委員会指導委員）が，「ビブリオテラピイ」という一文を「土」（金光図書館報，第27号，1953）に書き，私に送ってくださった。その要旨を紹介する。

“わたくしはビブリオテラピイに「読書療法」の文字をあてはめてから，もうかれこれ20年になろうとしているが，それはわが国の精神病学の泰斗呉秀三博士(1865～1932)の論文「精神療法ニ就テ」(東洋学芸雑誌，1917)から考えついたのである。”“呉博士はシデンハム(Thomas Sydenham, 1624～89)が「良好ナル書物ハ十百ノ医薬ニ勝ル」と主張したと記しておられる。”

これによると，「読書療法」という訳語は，昭和10年ごろ竹林氏によって始められたのであるらしい。

“ビブリオテラピイという語は，ようやく40年ぐらいの歴史しかもたないけれども，読書を治療の目的に利用した事実は古いむかしから行われていたようである。テーベにあった図書館の入口には，ギリシャ語で「霊魂のための医薬」という文字がきざまれていたと伝えられ，諷刺作家で医者であったラブレー(Francois Rabelais, 1494～1553)は，患者に与えたその処方箋に，文学書を書き加えていたといわれている。”

“ビブリオテラピイの定義……要するに「文献の利用による病患の科学的療法」である。”

ウェッブ博士(Dr. Gerald B. Webb)はまたその経験を述べて，「30年前わたくしは1人の神経衰弱にかかっている患者に出会った。そしてその回復が一こうにはかばかしくないのは，その患者がたえず書店に新刊の小説を注文している事実によることをつきとめた。わたくしは日ごろ伝記を読むことがすきであったが，それから思いついて，この患者にもまた他の患者にも伝記を読むようにすすめ，またいろいろな自然研究をすることを奨励したが，それが病気の回復を促すのに役立つことがわかった」といっている。”

---

* A Review on the study of bibliotherapy in Japan.

** SAKAMOTO, Ichiro. (Tokyo Gakugei Univ.)

“読書療法は医学の領域から，心理学および教育学の領域にまでその適用の範囲を広げたことは，当然のこととはいいながら驚くべき進歩である。ワシントンにあるアメリカ・カトリック大学のチャイルド・センターは，モーア博士（Dr. Thomas V. Moore）を主任として，青年前期および青年期の問題児に対し，それら児童の不健全な観念のかわりに，健全な態度と感情の安定を与える実際的方法として，ビブリオテラピイの寄与する効果に関心をもち，その技術の応用に努力しているという。”そして Katherine G. Kenealby: Therapeutic Value of Books（Youth, Communication, and Libraries, pp 69-77）によって，ムーアの所説を紹介し，このような仕事に協力することも図書館人の責任ではあるまいかと結んでおられる。

私はすぐ竹林氏に，日本における研究事例はないかをただしたが，全く見当たらないとの返事であった。氏はもう故人になられたが，今から30年前にすでに氏によってこの訳語が与えられ，研究の必要が説かれていたのである。しかし実際の研究は生まれなかったようである。またこれに対して，その効果を否定する意見の心理学者もないではなかった。

2. その研究の発掘

臨床心理学が日本に発達してきたのはごく最近のことであるから，その原理の応用としての読書療法はまだ普及するよしもなかったのである。しかし読書指導が行なわれている現場では，いわゆる問題児の治療を意図した読書の指導が，熱心な指導者によって個人的にくふうされているかもしれない。そう思ったので，図書館教育研究会の「読書指導研究双書」第3集「読書問題児の指導」(1957) を編集するに当たって，私は，読書問題児の指導事例をアンケートするついでに，“性格異常者を読書でなおした例”を，同会の会員に問い合わせた。これに対して，つぎの事例が報告された。

（1） 孤立児の指導例〔市川市国分小学校　小田島静子氏〕

小学2年K児。学級の子どもの3分の2は彼をきらっていた。理由は，乱暴でいじめるというのである。彼の作文によると，彼は母親の“子どもに対する取扱いの不手際から母親に対する欲求不満を感じ，情緒不安定な性格に陥ったのではないか”と思われた。

そこで小田島氏は，家庭訪問をして父兄に子どもの取扱いについて協力を求める一方，彼の性格異常を直すためにいっしょに本を読むことを始めた。

「赤ずきん」「笠地蔵」「荷籠を担いで」「愛の学校2年生」「フランダースの犬」「動物美談」「子鹿物語」と読みすすむうちに，“……がかわいそうだ”という感想が続いてあらわれるようになった。

「みにくいあひるの子」を全員に読んでやったのは効果があった。不潔でよごれた洋服を着ているTという女の子，尿失禁でいつも臭気を放っているN児の2人も，友だちから嫌われていたが，同情の目で見られるように変わった。そしてK児も，交友調査では，嫌いというものが2人になり，好きになった子が3人ふえた。“K児の行動や考え方はしだいに健康な方向に向かっている。”

（2） 高校生の危機の指導例〔神戸市長田高等学校　三木一逸氏〕

A青年は助産婦の母の手一つで育てられ，知能は優秀だが，不健康であった。2年生後期には，さかんに哲学書を読んでいた。大学への進学を断念したころから，“かっての自己意識過剰は底づよく，あせりと煩悶がギリギリのところまできてしまった。”彼を救ったのは「イエス伝」であった。彼の精神分裂のような状態は緩和し，現在は聖書学校に在学している。

B青年の父は戦死，母と2人の裕福な生活で，学力もすぐれ性格も明るかったが，空襲のために右腕を切断されてから，性格が一変した。“学生運動の時潮とともに戦争反対を叫ばざるを得なかったであろう。世間に対する反抗心も強い。教師に対する反感が徐々に現れてきた。”

三木氏は“人間の世界の底に流れる愛情を発見することに話題を集中して，詩集，小説を読むようにすすめ

て，時を待った。”

高村光太郎「道程」

〃　「智恵子抄」

中野重治詩集

ボードレール「悪の華」

倉田百三「出家とその弟子」

パスカル「冥想録」

ルソー「エミール」

芥川龍之介「侏儒の言葉」

夏目漱石「草枕」

〃　「こころ」

ゲーテ「若きヴェルテルの悩み」

などを推薦した。読書のあとの話し合いで，“自己の問題として把握させるように努力した。”今日の彼は“明るく人生を歩み得ている。”

3. その研究の推進

読書療法として科学的に研究したり，記録をとったりするようなことはなくても，その線に沿った指導は実際には行なわれているのである。そこでこの研究を推進するには，この目的の指導の事例をもっと多く収集するとともに，指導の原理と方法を明確にする必要があると感じた。それで私どもが上記の「読書指導研究双書」の第5集「読書による道徳教育」(1959) を編集するとき，ふたたび読書指導の研究者にお願いして，その事例を書いてもらった。そして私も「読書による性格治療の原理」を書いた。

その中で私は，読書療法の効果は，(1)読むこと自体から期待される。すなわち読書に必要な注意の集中や，情緒の安定が治療的効果をもたらす。もう一つは，(2)本の内容から期待される効果だと述べた。そして後者には，次のような点に留意するのがよいと述べた。

a．ヒューマン・インタレストを促す。

b．抑圧されている願望の補償的満足を図る。

c．自分の問題に気付かせ，その解決をはげます。

d．マイナスに対するトレランスを養う。

e．道徳的情操と是非善悪の判断を高める。（健全な価値基準を体得させる。）

指導事例には，次のようなものが得られた。

（1） 短気でけんか早い子の指導例〔千葉市院内小学校　大熊喜代松氏〕

小学校3年のS児。毎日1回以上けんかをする。成績は各教科ともひどく劣り，みんなの前で本を読んだことがない。

この子は読書能力の発達に欠陥があるのだった。そこで学校に特設されている治療教室に入れて，読みの治療指導を行なった。9カ月後には読書能力の不振がほぼ治療されて，それとともにけんかも少くなり，教科学習にも積極性が出てきた。——これは能力不振に起因した適応異常の治療例である。

（2） へそまがりの指導例〔東京都桃園第二小学校　竹ノ内一郎氏〕

小学3年のW児。人から世話をやかれることを極端にきらい，へそまがりで，わがままで協調性がない。

竹ノ内氏は“非協力的なWの性格が，みんなにめいわくになっていることを，ひとりでにわからせようとした。”毎週2回彼と本を読んだ。「ヘンゼルとグレーテル」「みにくいあひるの子」「花はだれのために」までは“思ったほどの効果は得られなかった”が，「泣いた赤おに」で，反応があった。氏は非指示的態度を通したが，W児は原稿用紙に“ぼくはすこしあかおにににているとおもいました。それはみんなにめいわくをかけることがあるからです”と書いて持ってきた。学年末にはずいぶん協力的な態度が育ってきた。むろん日々の生活の中での教師の指導もあったのである。

（3） 脱線児の指導例〔東京都芳林小学校　松本武氏〕

小学1年のK児。学校生活のきまりが守れない。注意の持続力がない。すぐ暴力を振うが，けんかは弱い。身だしなみや整頓がわるい。虚弱で，父親に溺愛されている。

松本氏の指導は，第1学期は，“本を見ることによって，持続力をつける”こと，第2学期は，“本を借りる

ことによる，ルールの理解”であった。なにしろ知能偏差値は39で，学力テストは50人中49位という子である。第3学期には，内容についての話し合いにはいる予定であったが，教科書に出てくる「イソップ」さえ理解できない。彼の好きなのは「やんぼ・にんぼ・とんぼ」であったが“K児のおもしろいというところは，つかまるところとか，危難に合うところとかであって，その裏にひそむものは読みとれない”のであった。低学年のしかも読書能力の低い児童には，内容による指導よりも，読書活動そのものによる指導をねらうほかはないと，氏は結論している。

（4） 性的早熟児の指導例〔東京都目黒第十中学校 今村秀夫氏〕

中学2年のF子は，上級の男性の後ばかり追いまわし，級友はもとより，教師仲間でも“悪名の高い”子であった。しかし本人はそうした交際をみずから正当化するための日記を書いていた。

今村氏はその日記を見せてもらえるようになった。“F子と話しているうちに私は，彼女は単に異性を求めているのではなく，もっと本質的な何物かを強く求めているのだ。それが異性を求めるといった形で表面化しているのだという気がした。だから禁止的なことはいっさいいわず，彼女の気持を認めてやりながら，もっぱら話の聞手にまわってやった。”

秋元書房の「十五歳の頃」をはじめとする健康なロマンスもの，「ポールとビィルジニー」「あしながおじさん」「伸び支度」（藤村）「思い出」（太宰治）などをすすめた。彼女の求めているものは周囲の人々からの愛情であることがわかってきた。思春期的な動揺のままに行動している自分の愚かさを反省するようになった。友人が変わり，二学期の終わりには気持が安定してきた。妙なうわさもとだえた。

しかし“本の力だけが彼女を変えたとは思わない。人間を変えるということはそう簡単に，単一な方法だけではできない。そこにはいろいろの力が働いている。偶然という要素すら力を貸しているように思える。”

（5） 集団的な指導例〔東京都立白鷗高等学校 大江一道氏〕

高校1年の社会科社会の「倫理単元」の指導内容を，(a)青年期の心理，(b)人生観の探究，(c)現代社会と道徳の3項目に定めて展開した。

(a)の取扱いでは，ヘッセの「車輪の下に」その他の諸作品，カロッサのもの，山本有三の「路傍の石」その他，下村湖人の「次郎物語」等を読み，感想文を書かせた。生徒から出された問題に対して，批評や解答をしてやるという方法で授業を進めた。この授業から生徒が学んだものは次のようであった。

ア．“自分の悩んでいたことや，思っていたことが自分だけでないことがわかって，なんとなく気が楽になった”……23.4%

イ．“人間の心がどんな変化していくかを知って人間の心理に関心や興味をもつようになった”……19.6%

ウ．“人間の成長過程における青年期の意義を考えなおしてみた”……15.6%

エ．“自分の心の動きなどはあまり注意しなかったが，自分をみつめようという気がおこった”……14.1%

(b)については，倫理思想を体系的に教えるのがねらいだったから，読書によって消化させるのはむりで，主として講義により，最後に，魯迅・ロマンロラン・シュバイツァー等の著作や生活にふれて話してやった。反響の6割は，人生観を確立することの重要性がわかったというのであった。彼らはさっそく「阿Q正伝」「ジャン・クリストフ」などにとびついていった。

4. その前進

上記の文献は，わが国での読書療法の研究の橋頭保となったと自負している。そのころからようやく各地の読書指導に関する研究会などで，性格異常児の読書による治療指導が問題となりはじめた。私も司書教諭の講習や研究会の講演など機会のあるごとに，その必要を説くにつとめた。

1962年の「青少年問題」7月号に，「子どもの読書療

法について」を書いたが，これは矯正指導の関係者からたくさんの問合状をいただいた。同じく8月号の「児童心理」に，阪本敬彦が「読書療法について」を書いている。ともに啓蒙的な記事だが，こうしてジャーナリズムの関心を呼ぶようになったのも，この運動の前進の証と見てよいであろう。その後，新聞・雑誌・放送などから，しきりにその指導事例を求めてくるようになった。

図書館関係も，動きはじめた。そのきっかけは，「Library Trends」の「Bibliotherapy」特集号（Oct. 1962）であった。すぐ渡辺茂男氏がその1部を訳出した「日米フォーラム」の特集号（1963，7月）が一般に配布された。ただしこれは図書館の奉仕活動としての立場からの考察が中心で，われわれには直接関係のないものである。それにしてもこの問題が時代の脚光を浴びてきたことは事実である。

阪本敬彦は「教育と医学」（1963，10月号）に「ビブリオセラピー」を書き，翌年「学校図書館」（1964，9月号）には，私が「性格形成と読書心理」を，室伏武氏が「読書による問題児の矯正指導」を書いた。

5. その裏方

読書療法を実施するには，問題児の問題を治療するのに適当な読み物を選択することが何よりも重要な決め手となる。それには広く読み物についての知識が必要で，これが隘路になって誰にでも実施できるというわけにはいかないのが実情である。アメリカでムーア教授がさかんにこれを実施しているのも，問題に応じてただちに適書を索引できる目録を作っているからである。Clara J. Kircher: Character Formation through Books: A Bibliography.（1954）がそれである。

わが国にもこれが必要だと感じて，深川恒喜氏，滑川道夫氏の協力を得て，「読書療法の手引」を編集することに着手したのは1956年であった。これはたいへんな仕事で，研究費がつづかかず，約1年後に挫折してしまったのは残念であった。

日本読書学会の基礎がようやく固まってから，1961年の末に，われわれはふたたびこの仕事に戻った。さいわいに会員の協力を得て，「子どもの性格形成の適書目録，低・中学年用」を1963年に，同じく高学年・中学校用を1964年に，それぞれ機関誌「読書科学」に発表することができた。さらに訂正を加えて「読み物による性格形成・適書目録」上下2巻として1964年に出版した。

この前後に，文部省の道徳教育に対する批判が高まっており，“1編の読み物を与えて徳目主義の道徳教育を安易に行なうべきではない”という声があった。そのとばっちりがこちらへも飛んできて，誤解される一幕もあったが，それとこれとは違う軌道であることが理解されてきた。

この目録ができて，わが国の読書療法もいよいよ本格的な研究事例を生む段階にはいったわけである。

6. 「読書科学」の中の事例

日本読書学会の発表文献の中で，読書療法の事例として注目すべきは，次の3編である。

（1） 自殺を企図した高校生の事例研究〔兵庫県伊丹高等学校　庵逧巌氏〕

Kの父は戦死し，母と祖母との3人暮らしである。睡眠薬を服用，自殺をはかったが，生命をとりとめた。自殺の直接の原因はわからない。ロールシャッハ・テストによると，妄想型分裂性に属する疑いがこい。

彼に対して client-centered counceling が与えられた。加藤日出男「ねっこ」が感銘を与え，和田伝や島一春の農民文学によって現実の農村生活の課題を考えさせるなどの指導がなされたとあるが，このリポートは彼の精神分析の解説が主であって，読書療法の経過については充分な記述がないのが残念である。〔読書科学 No. 24, 1963〕

（2） 問題児の読書による治療指導の事例研究〔大阪市岸里小学校　上吉川脩氏〕

A児（4年生）は溺愛型の父親との2人暮らし。狂言強盗を働いた。不安傾向が強く，孤立型。これ対して生活指導を与えるとともに，(a)不幸な境遇をテーマにした

物語，(b)自分を反省し，自分の立場を考えさせる物語，(c)自分の不幸な境遇を乗り切っていく勇気を与えるような物語として，

ローデン「イルゼの幸福」

国分「日本クオレ」

ユーゴー「ジャンバルジャン」

ケストナー「飛ぶ教室」

オーマン「アルプスの赤い旗」

マロー「家なき子」

中沢「日本の英雄」

漱石「坊ちゃん」

などを読ませた。1年後のテストでは不安傾向が緩和し，友だちができるようになった。

B児（4年生）も不安傾向が強い。干渉型の母親に勉強をしいられ，悪感情をいだいている。友人には乱暴をするので嫌われている。この子にもカウンセリングを加えるとともに，(a)母親の愛情にふれるもの，(b)自分の将来を考えさせるようなものとして，

三木澄子「ナイチンゲール」

カルナーホワ「愛の学校」

シートン「かしこいコヨーテ」

譲治「善太と三平」

広介「泣いた赤おに」

などを読ませた。1年後には不安傾向が低くなった。

いずれも治療の前後に数種のテストを行ない，カウンセリングと読書療法とを並行的に行なったまとまった事例研究である。〔読書科学，No. 27，1964〕

（3） 犯罪少年の読書療法による臨床例〔福岡家庭裁判所飯塚支部　大神貞男氏〕

中学3年のKは，けんかを好み，刃物不法所持で2回補導され，試験観察処分となった。

大神氏の所見では，K少年の不良化の原因は父親の不倫生活と暴君的態度にもとずく家庭内の不和にあるとされた。よってまず「次郎物語」を読ませ，“主人公が強い愛情不満の中でも強く正しく生長していく過程に，いかに自己を投映して，自己を評価し洞察するかを見ようとした。”予期の治療効果が出たので次に「仔鹿物語」を読ませた。家庭内の問題がなくなるとともに，K少年も立ち直った。その経過がたんねんに記録されたりっぱな報告である。〔読書科学，No. 27，1964〕

このように読書療法の実験も本格的になってきた。これによって方法と技術とが発達し，多くのあわれな子どもが救われるようになることを祈念するものである。

読書療法研究に関する文献目録*

野間教育研究所編集**

1. Agnes, Sister Mary. "Bibliotherapy for Socially Maladjusted Children" *Catholic Educational Review*, 44-8:16, Jan. 1946.
2. Agnes, Sister Mary. "Influence of Reading on the Racial Attitudes of Adolescent Girls" *Catholic Educational Review*, 45:415-20, Sep. 1947.
3. Allen, Edward B. "Books Help Neuropsychiatric Patients," *Library Journal*, 71:1671, 1946.
4. Alston, Edwin F. "Psychoanalytic Psycho therapy Conducted by Correspondence," *International Journal of Psychoanalysis*, 38:32-50, 1957.
5. American Occupational Therapy Association. *Occupational Therapy Reference Manual for Physicians*. W. C. Brown Co. 1960, p. 3.
6. Anastasi, Anne. "Psychological Testing" 2nd ed. Macmillan Co. 1961.
7. Appel, K. E. "Psychiatric Therapy." *In* J. McV. Hunt, ed. *Personality and the Behavior Disorders*. Ronald Press Co. Vol. 2, p. 1107.
8. Asheim, Lester. "Research in Mass Communication and Adult Reading," *Library Trends*, 6:120-121, Oct. 1957.
9. Baatz, Wilmer H. "Patients' Library Services and Bibliotherapy," *Wilson Library Bulletin*, 35:378-379, Jan. 1961.
10. Bailey, Matilda."A Candle of Understanding," *Education*, 76 515-521. May, 1956,
11. Bailey, Matilda. "Therapeutic Reading," *ABC Language Arts Bulletin*, I, No. 6, American Book.
12. Bailey, Matilda. "Therapy Means Understanding," *ABC Language Arts Bnlletin*, II, No.1. American Book.
13. Baker, L. "Personal Experience Books," *Hospital Book Guide*, 13:32, 1952.
14. Ball, Ralph C. "Prescription Books," *ALA Bulletin*, 145, Mar. 1945.
15. Barbe, Walter B. "Differentiated Guidance for the Gifted," *Education*, 74 : 306—311, January, 1954.
16. Barber, E. M. "Library Activities in a Hospital for Neuropsychiatric Patients," *U. S. Veterans Bureau Medical Bulletin.*, 7:180, 1931.
17. Barnett, Abraham N. "Beyond Librarianship: A Critique of Rationales of Special Library Service to the Aged," *Library Quarterly* 31: 178-186, Apr. 1961.
18. Bass, A. H. "Great Books Are Good Treatment," *Mental Hospitals*, 2:43-44, May 1960.
19. Becker, Helen "The Hospital Librarian Speaks to the Occupational Therapist," *American Journal of Occupational Therapy*, 1 : 354-357, Dec. 1947.
20. Benne, K. B. "Why I Ran for President of the A.E.A." *Adult Leadership*, 4:7, Jan. 1956.
21. Betram, Jean DeSales. "Books to Promote Insights into Family and Life Problems," *English Journal*, 50. 477-482. Nov. 1956.
22. Bibring, Eduard. "Psychoanalysis and the Dynamic Psychotherapies," *Journal of American Psychiatric Association*, 2:745-771, 1954.
23. Bickel, R. Brookes. "The Library As a Therapeutic Experience," *Bulletin of the Medical*

* The bibliography for the study on bibliotherapy

** Noma Institute of Educational Research

Library Association, 47:305-314, July 1959.

24. Bishop, W. J. "Hospital Library and Bibliotherapy,"*Library Associaton Records*, 1 : 198 231, 274, 1931.
25. Blackman, N. "Experiences with a Literary Club in the Group Treatment of Schizophrenia," *Occupational Therapy*, 19:293, 1940.
26. Bradison, Marguerite. "Remotivation Technique." Moose Lake State Hospital, 1962.
27. Bradley, C. and Bosquet, E. S. "Use of Books for Psychotherapy with Children," *American Journal of Orthopsychiatry*, 6:23, 1936.
28. Bratton, Dorothy. "Reading for Therapy," *English Journal*, 41 : 339-346, 361. Sep. 1957,
29. Brightbill, Charles Kestner. *Man and Leisure*. Prentic-Hall 1961.
30. Broderick, Dorothy M. "The Opportunities That Books Offer," *Junior Libraries*, 6:13-23, Dec. 15, 1959.
31. Brooks, A. R. "Developmental Values in Books," in Henne F. ed. "Youth Communications and Libraries," ALA, 1949.
32. Brooks, A. R. "Integrating Books and Reading with Adolescent Tasks" *School Review*, 58 : 211-9, April. 1950.
33. Brower, Daniel. "Bibliotherapy in Progress." *In* Brower D. eds. *Progress in Clinical Psychology*. Grune and Stratton, 1956, Vol. 2.
34. Bruce-Porter, Bruce. "The Need for Libraries in Hospitals As Part of the Scheme of Curative Medicine." *Journal of State Medicine* (London), 38:710-715, Dec. 1930.
35. Bryan, Alice I. "The Psychology of the Reader," *Library Journal*, 64:7, Jan. 1. 1939.
36. Bryan, Alice I. "Can There Be a Science of Bibliotherapy?" *Liberary Journal.*, 64:773, Oct. 15, 1939.
37. Bryan, Alice I. "Personality Adjustment through Reading," *Library Journal*, 64:573-576, Aug. 1939.
38. Bryan, Alice I. "Toward a Science of Bibliotherapy," *In* Lawton, G. ed. *New Goals for Old Age*. Columbia University Press, 1943.
39. Bry, Ilse. "Medical Aspects of Literature," *Bulletin of the Medical Liberary Association*, 30:252-266, April 1942.
40. Burgess, Gelett. "How To Not Read," *The Critic*, 36:33-38, Jan. 1900.
41. Bursinger, B. C. and Kenyon, X. "Neuropsychiatric Hospital Library," *Library Journal* 79:20, 1954.
42, Burton, Dwight. "Books to Meet Students Personal Needs," *English Journal*, 26:469-73 Nov. 1947.
43. Carlsen, G. R. "Literature and Emotional Maturity," *English Journal*. 38:130-8, Mar. 1949.
44. Chaney. Roger C., and Ingalls, Gladys A. "Reading Materials Used in Group Bibliotherapy Program. V. A. Hospital, Northport New York," *The Bookmark*, 13:211-214, June. 1954.
45. Cleary, Florence Damon. "Blueprints for Better Reading," H. W. Wilson, 1957.
46. Coakley, F. M. "Time." *American Journal of Mental Deficiency*, 65:420, Jan. 1961.
47. Cohoe, Edith. "Bibliotherapy for Handicapped Children," *NEA Journal*, 49:34-36, May 1960.
48. Cole, D. M. "Bad Boys and Their Books," *Wilson Library Bulletin* 16:532-6, 543, Mar. 1942.
49. Condell, L. "Library as a Road to Reeducation in Responsibility for Neuropsychiatric Patients," *Medical Bulletin of Veterans Administration*, 13:77, 1936.
50. Condon, Minette. "Library Therapy," *Hospital Progress*, 27:14-16, Jan. 1946.
51. Connell, Suzanne McL. "Bibliotherapy for Librarians," *Willson Library Bulletin*, 25:75, Sep. 1950.
52. Coville, W. J. "Bibliotherapy: Some Practical Considerations (Part I)," *Hospital Progress*, 41 : 138-142, April 1960.
53. Craigie, Annie L. "The Cheering Stimulus of Poetry in Veterans' Bureau Hospitals,"

Modern Hospital, 33:85-88, Nov. 1929.

54. Creglow, Elizabeth R. "Therapeutic Value of Properly Selected Reading Matter," *Medical Bulletin of the Veterans Administration*, 7: 1086-1089, Nov. 1931.
55. Crosby, Alice A. "Selecting Books for Neuropsychiatric Patients," *U. S. Veterans Bureau Medical Bulletin*, 7 : 1214-1217, Dec. 1931.
56. Crothers, S. McC. "A Literary Clinic," *Atlantic Monthly*, 118:291-301, Aug. 1916.
57. Darling, Richard L. "Mental Hygiene and Books. Bibliotherapy as Used with Children and Adolescents," *Wilson Library Bulletin*, 32:293-296, Dec. 1957.
58. Darrin, Ruth, ed. "The Library as a Therapeutic Experience," *Bulletin of the Medical Library Association*, 47:305-311, July 1959.
59. Davie, Lou, "The Function of a Patients' Library in a Psychiatric Hospital," *Bulletin of the Menninger Clinic*, 4:124-129, July 1940.
60. De Boer, John. "Literature and Human Behavior," *English Journal*, 39:76-72, Feb. 1950.
61. Delaney, Sadie Peterson. "The Library—A Factor in Veterans' Bureau Hospitals," *United States Veterans Bureau Medical Bulletin*, 6: 331-333, April 1930.
62. Delaney, Sadie Peterson. "The Place of Bibliotherapy in a Hospital," *Library Journal*, 63:305-308, April 15, 1938.
63. Delaney, Sadie Peterson. "Time's Telling," *Wilson Library Bulletin*, 29:461-463, Feb. 1955.
64. Delaney, Sadie. Peterson. "Bibliography on Bibliotherapy," *Bulletin of Bibliography*, 20: 135, 1951.
65. Denber, Herman C. B., ed. *Research Conference on Therapeutic Community: Proceedings*. Charles C Thomas, 1960.
66. Dickens, Charles. *American Notes for General Circulation*. London, Chapman and Hall, Vol.1, pp. 106, 109, 1842.
67. Dolan, Rosemary, *et al.*, comp. *Bibliotherapy in Hospitals: An Annotated Bibliography*, 1900-1957. Washington, Veterans Administration, 1958.
68. Dollard, John, and Miller, Neal E. *Personality and Psychotherapy*. McGraw-Hill 1950.
69. Dolorice, Sister. "Doors are Easily Opened," *America*, 76:184-5, Nov. 1946.
70. Du Bois, Isabel. "Books as a Solace for the Sick," *Hygiea*, 10:55-58, Jan. 1932.
71. Duff, Annis. "The People Who Lives in Books" *Monograph in Language Arts*, 54, Row Peterson, 1948.
72. Duncan, Melba H. "Clinical Use of Fiction and Biography Featuring Stuttering," *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 14:139-142, June 1949.
73. Dunton, W. R. and Licht, S. "Occupational Therapy" C. C. Thomas, 1950. 2nd ed 1965.
74. Eagle, O. C. "Combating Juvenile Delinquency Through Group Activities in Public Library," *Wilson Library Bulletein*, 19:607-9, 611, May 1954.
75. Eastman, Linda A. "Here We Are!" *Modern Hospital*, 18:359-360, April 1922.
76. Ebaugh, F. G. "Library Facilities for Mental Patients," *American Library Association Bulletin*, 29:619, 1935.
77. "Editorial: Current Problems of Supervision in Psychotherapy," *American Journal of Psychotherapy*, 12:1-4, Jan. 1958.
78. Edwards, Margaret A. "Let the Lower Be Burning," *English Journal*, 41, 461-469. Nov. 1957
79. Elliott, Pearl G. "Bibliotherapy; Patients in Hospital and Sanitarium Situations," *Illinois Libraries*, 41:477-482, June 1959.
80. Elliott, H. S. and G. L. *Solving Personal Problems*, Holt, 1936.
81. Elkins, Deborah. "Students Face Their Problems," *English Journal*, 38:130-8, March 1949.
82. Erickson, Erik H. "Childhood and Society" 1st ed. W. W. Norton and Co. 1950.

83. Ericson, M. H. "A Study of an Experimental Neurosis Hypontically Induced in a Case of Ejaculatio Praecox," *British Journal of Psychology*, 15:37-50, 1955.

84. Fenichel, O. "The Scoptophilic Instinct and Identification," *International Journal of Psychoanalysis*, 18:6, 1937.

85. Fenichel, O. "The Psychoanalytic Theory of Neurosis" W. W. Norton and Co. 1945.

86. Fierman, L. B. "Proceedings, Area One Chief Librarians Meeting, Veterans Administration," West Haven, 1954.

87. Fierman, L. B., and Fierman, Ella Y. "Bibliotherapy in Psychiatry." *In* Dunton and Licht, eds. *Occupational Therapy, Principle and Practice*. 2d ed. Charles, C Thomas, 1957.

88. Fidler, Gail S., and Fidler, J. W. *Introduction to Psychiatric Occupational Therapy*. Macmillan Co. 1954.

89. Fihe, P. J. "The Juvenile Delinquent and the Library," *Library Journal*, 69: 688, Sep. 1944.

90. Flandorf, Vera. "Getting Well with Books," *Library Journal*, 78:651-654, Apr. 1953.

91. Fleming, M. "Our Library Circulation," *Washington Bulletin*, 3:30, 1940.

92. Floch, Maurice. "Correctional Treatment and the Library," *Wilson Library Bulletin*, 26:454, Feb. 1952.

93. Floch, Maurice. "Bibliotherapy and the Library," *Bookmark*, 18:57-59, Dec. 1958.

94. Frank, Josette. "Books and Children's Emotions" *Child Study*, 26:5-6, 24-6, Winter 1948-49.

95. Frank, Jerome. *Persuasion and Healing, A Comparative Study of Pshchotherapy*. The Johns Hopkins Press, 1961.

96. Freud, S. "The Dynamics of Transferene" in collected papers of Sigmund Freud by E. Jones, London, 1950.

97. Foreman, Emma T. "Carefully Chosen Books Have Tharapeutic Value," *Modern Hospital*, 41:69-70, Nov. 1933.

98. Gagnon, S. "Organization and Physical Set-Up of the Mental Hospital Library," *Diseases of the Nervous System*, 3:149, May. 1942.

99. Gagnon, S. "Is Reading Therapy?" *Diseases of the Nervous System*, 3:206, July 1942.

100. Gardner, W. P. "A Psychiatric Hospital Library," *Minnesota Library Notes and News*, 12:179, 1938.

101. Gartland, Henry J. "How to Make the Most of the Library Service." *In* H.A. Pattison, ed., *The Handicapped and Their Rehabilitation*. Charles C Thomas ,1957.

102. Gartland, Henry J. "Notes on Education for Hospital Librarianship," *ALA Bulletin*, 55:345-346, April 1961.

103. Gates, Arthur I. "Character and Purposes of the Yearbook," *Reading in the Elementary School*, Forty-eighth Yearbook of the National Society for the Study of Education, Part II, University of Chicago Press, Chicago, 1949, 1-9.

104. Glaser, Florence. "The Library As a Tool in Re-education," *Top of the News*, 16:24-27, May 1960.

105. Glover, E. "The Therapeutic Fffect of Inexact Interpretation," *International Journal of Psychoanalysis.*, 12, 1931.

106. Goffman, Erving. "On the Characteristics of Total Institutions," *Asylums*. Anchor Books, 1961.

107. Goldhor, Herbert. "A Plea for a Program of Research in Librarianship," *ALA Bulletin*, 56: 44-46, Jan. 1962.

108. Goldsmith, Sadie. "Place of Literature in Character Education" *Elementary English Review*, 18:176-8, May 1940.

109. Gottschalk, Louis A. "Bibliotherapy as an Adjuvant in Psychotherapy," *American Journal of Psychiatry*, 104:632-637, April 1948.

110. Graham M. B. "Motivation of Reading Among Neuropsychiatric Patients," *U. S. Veterans Bureau Medical Bulletin*, 6:1088-1090, Dec. 1930.

111. Gray, W. S. "Promoting Personal and Social Development Through Reading"

Supplementary Educational Monographs, No. 64, University of Chicago Press, 1947.

112. Green, Elizabth, and Schwab, S. I. "The Therapeutic Use of a Hospital Library," *The Hospital Social Service Quarterly*, 1:147-157, Aug. 1919.

113. Greenblatt, Milton, *et al.*, eds. *The Patient and the Mental Hospital.* Free Press, 1957.

114. Grossman, M. "Group Therapy Program in a Neuropsychiatric Hospital," *Medical Bulltien of Veterans Administration*, 21:149, 1944.

115. Haines, Helen E. "Living with Books: The Art of Book Selection" *Columbia University Studies in Library Sevice*, No. 2, 2nd ed. Columbia University Press, 1950

116. Hannah, Ruby. "Navy Bibliotherapy: Library Programs," *Library Journal*, 80:1171-1173, May 15, 1955.

117. Hannigan, Margret C. "An Experience in Group Bibliotherapy," *American Library Association Bulletin*, 148, 1954.

118. Hannigan, Margret C. "Hospital-Wide Group Bibliotherapy Program," *Bookmark*, 13:203-210. June. 1954.

119. Hannigan, Margaret C. "As the Librarian Sees It," *Top of the News*, 16:13-15, March 1960.

120. Harper, Robert. *Psychoanalysis and Psychotherapy*; 36 *Systems*. Prentice-Hall, 1959.

121. Hart, R. E. "Paving the Road to Health with Books," *Occupational Therapy and Rehabilitation*, 22:228-233, Oct. 1943.

122. Hartley, H. W. "Developing Personality Through Books" *English Jourual*, 40:198-204, April 1951.

123. Hartman, Esther A. "Imaginative Literature As a Projective Technique: A Study in Bibliotherapy." Unpublished Ph. D. dissertation, Stanford University, 1951.

124. Havighurst, R. J. "Developmental Tasks and Education" University of Chicago Press, 1948.

125. Heath, R. G. "Group Psychotherapy of Alcoholic Addiction," *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, 5:55,1945.

126. Heaton, Margaret M. and Lewis, Helen B. "Reading Ladders for Human Relations," American Council on Education, 1954.

127. Hillson, Norman. "Curing Through Reading," *Wilson Library Bulletin*, 25:316-317, Dec. 1950.

128. Hinsie, Leland E., and Campbell, Robert Jean, eds. *Psychiatric Dictionary.* Oxford University Press, 1960, p. 95.

129. Hirsch, Lore. "How a Doctor Uses Books," *Library Journal*, 75:2046-2049, Dec. 1950.

130. Hospital Libraries. Cambridge Conference. *The Lancet*, 2:777-778, Oct. 4, 1930.

131. Ince, E. C. "Passports to New Worlds" Christian Science Monitor Weekly Magazine Section, July 3, 1943.

132. Ingram, Madelene E. *Principles of Psychiatric Nursing*. 3rd ed. Saunders Co. 1949, pp. 214-219.

133. Ireland, G. O. "Bibliotherapy as an Aid in Treating Mental Cases," *Modern Hospital*, 34: 87-91, June 1930.

134. Jackson, Josephine A. "Thrapeutic Value of Books," *Modern Hospital*, 25:50-51, July 1925.

135. Jahoda, Marie. *Current Concepts of Positive Mental Health.* Basic Books, 1958.

136. Jensen, Deborah M., ed. *Principles and Technics of Rehabilitation Nursing*. 2nd ed. Mosby, 1961.

137. Jensen, Nina B. "Group Therapy in a Hospital Library," *Medical Bulletin of the Veterans Administration*, 20:207-9, 1943.

138. Jones, E. K. "Hospital Libraries," ALA, 1939.

139. Jones, Maxwell, *et al. The Therapeutic Community*. Basic Books, 1953.

140. King, M. B. "Human Relations in Children's Books," *Wilson Library Bulletin*, 22:675-8, May 1948.

141. Kircher, C. J. "Bibliotherapy : the Librarian Acts", *Catholic Library World*, 19:958, 1947.

142. Kircher, C. J. "Bibliotherapy and the Catholic School Library," *in* Martin, David, ed.

Catholic Labrary Practice Vol. 2, University of Portland Press, 1950.

143. Kircher, C. J. "Character Formation Through Books: A Bibliography," Catholic University of America, 1952.

144. Kraus, Eileen. "Bibliotherapy for Beginners in Hospital Library Work," *AHIL Quarterly*, 2:10-12, Winter 1962.

145. Lazarsfeld, S. "Use of Fiction in Psychotherapy," *American Journal of Psychotherapy*, 3:25, Jan. 1949.

146. Lazell, E. W. "Group Treatment of Dementia Praecox," *Psychoanalystic Review*, 8:168, 1921.

147. Lee, H. B. "Projective Features of Contemplative Aesthetic Experience," *American Journal of Orthopsychiatry*, 19:101-1 1949.

148. Leslle, F. "Choice of Reading Matter by Neuropsychiatric Patients," *U. S. Bureau of Veterans Administration Medical Bulletin*, 7:779, 1931.

149. Levine, Maurice. *Psychotherapy in Medical Practice*. Macmillan Co. 1946.

150. Lind, J. E. "The Mental Patient and the Libdrary", *Bookman*, 65:138, 1927.

151. Lind, Katherine Niles. "The Social Psychology of Children's Reading," *American Journal of Sociology*, 41, 454-469. Jan, 1936.

152. Lindahl, Hannah M. and Koch, Katherine. "Bibliotherapy in the Middle Grades," *Elementary English*, 29,390-396. Nov. 1952.

153. Jones, P. "Hospital Libraries in the State Hospitals of Minnesota," *Bulletin of American Hospital Association*, 3:433, 1929.

154. Jones, Perrie. "What the Librarian Can and Should Mean to the Hospital," *Modern Hospital*, 37:53-56, Nov. 1931.

155. Jones, Perrie. "Mental Patients Can Read," *Modern Hospital*, 49:72-75, Sep. 1937.

156. Jones, Perrie. "Hospital Libraries–Today and Tomorrow," *Bulletin of the Medical Library Association*, 32:467-478, Oct. 1944.

157. Junier, Artemisia J. "A Subject Index to the Literature of Bibliotherapy, 1900-1958." Unpublished Master's thesis, Atlanta University, 1959.

158. Kamman, Gordon R. "The Doctor and the Patients' Library," *Transacions of the American Hospital Association*, 36:374-384, 1934.

159. Kamman, Gordon R. "Future Aims of the Hospital Library," *Minnesota Medicine*, 21:559-561, Aug. 1938.

160. Kamman, Gordon R. "The Role of Bibliotherapy in the Care of the Patient," *Bulletin of the American College of Surgeons*, 24:183-184, June 1939.

161. Kamman, Gordon R. "Balanced Reading Diet Prescribed for Mental Patients," *Modern Hospital*, 55:79-80, Nov. 1940.

162. Karpman, Ben. "Objective Psychotherapy, Principles, Methods, and Results," *Journal of Clinical Psychology* (Monograph Supplement, No. 6), July 1948.

163. Kaufman, F. W., and Taylor, W. S. "Literature As Adjustment," *Jonrnal of Abnormal and Social Psychology*, 21:233-234, Sep. 1936.

164. Keneally, K. G. "Therapeutic Value of Books", *In* Frances, H. ed. *Youth Communications and Libraries, ALA*, 1949.

165. Kinney, Margaret M. "Bibliography and the Librarian," *Special Libraries*, 37:175-180, July-Aug. 1946.

166. Long, Dorothy E. "But This Job Has Everything," *Wilson Library Bulletin*, 25:73-74, Sep. 1950.

167. Lorang, Sister Mary Cordè. "The Effect of Reading on Moral Conduct and Emotional Experience," Catholic University of America Press,1945.

168. Loretto, Sister M. Francis. "Developing Spiritual Values in Children," *Elementary English*, 24:388-95, Oct. 1947.

169. Lucile Agnes, Sister. "Bibliotherapy: A Counseling Technique," *Catholic Library World*, 18:147-149+, Feb. 1947.

170. Lucioli, Clara E. "Full Partnership on the Educational and Therapeutic Team," *ALA*

Bulletin, 55:313-314, April 1961.

171. Macrum, A. M. "Hospital Libraries for Patients," *Library Journal*, 58:78, 1933.

172. Maeda, Edith M. "The Link Between Hospital and Community," *Top of the News*, 17: 48-49+, Oct. 1960.

173. Marie, Sister Helen. "Bibliotherapy." *Catholic Educational Review*, 45:412-4, Sep. 1947.

174. Martin, Clyde. "But How Do Books Help Children?" *Junior Libraries*, 1 : 83-7 Oct. 1955.

175. Mascarino, Eleanor, and Goode, Delmar. "Reading as a Psychological Aid in the Hypoglycemic Treatment of Schizophrenia," *Medical Bulletin of the Veterans Administration*, 17:61-65, July 1940.

176. May, Rollo. "Historical and Philosophical Suppositions for Understanding Therapy," *In* Mowrer. O. H. *Psychotherapy: Theory and Research.* Ronald Press Co. 1953,

177. Mayden. P. M. "What Shall the Psychiatric Patient Read?" *American Journal of Nursing*, 52:192, 1952.

178. McAlister, Clifton. "Bibliotherapy: The Nurse and the Librarian Working Together Can Make the Library a Valuable Therapeutic Tool," *American Journal of Nursing*, 50:356-357, June 1950.

179. McCormick, Elisie. "They Can Be Talked Back to Sanity," *Today's Health*, 40:44, March 1962.

180. McDaniel, Walton B., II. "Bibliotherapy; Some Historical and Contemporary Aspects," *ALA Bulletin*, 50:584-589, Oct. 1956.

181. McFarland, J. H."A Method of Bibliotherapy" *American Journal of Occupational Therapy*, 6:66, 1952.

182. Menninger, Karl A. "Reading As Therapy" *ALA Bulletin*, 55:316-319, April 1961.

183. Menninger, Karl A. "Psychoanalytic Psychiatry," *Bulletin of Menninger Clinic*, 4:105, 1940.

184. Menninger, W. C. "Bibliotherapy," *Bulletin of Menninger Clinic*, 1:263, Nov. 1937.

185. Meier, Arnold R., Cleary, Florence Damon, and Davis, Alice M. "A Curriculum for Citizenship," Wayne University, 1952.

186. Methven, M. L. "Just One Child At a Time," *Library Journal.* 74:99-101, Jan. 1949.

187. Metropolitan School Study Council. "Bibliography for Children's Reading,"

188. Metropolitan School Study Council. "Bibliotherapy." *Mental Hygiene.* 4:28, 1938.

189. Millar, F. G. "Patients Ply Their Hobby in the Hospital Library," *Occupational Therapy*, 14:121, 1935.

190. Minnesota, University, Center for Continuation Study. *Proceedings of the Conference on the Role of Education for Aging and the Aged.* 1961.

191. Moody, Edna Pearl. "Books Bring Hope," *Library Journal*, 77:387-392, March 1, 1952.

192. Moore, Josephine C. "Reading Aids for Quadriplegic Patients," *American Journal of Occupational Therapy*, 10:119-20, May-June 1956.

193. Moore, Thomas Verner. "Bibliotherapy," *Catholic Library World*, 15:11-20, 24, 1943.

194. Moore, Thomas Verner. "Personal Mental Hygiene," Grune and Stratton, 1944.

195. Moore, Thomas Verner. "The Nature and Treatment of Mental Disorders," Grune and Stratton, 1944. 2nd ed. 1951.

196. Moore, Thomas Verner. "Bibliotherapy." *In The Catholic Elementaty School Library.* Catholic University of America Press, 1945.

197. Moore, Thomas Verner. "The Calamities of Betty." *In* Knickerbocker, W. S. *Twentieth Century English.* Philosophical Library, 1946. p. 190-200.

198. Morrow, Robert S., and Kinney, Margaret M. "The Attitudes of Patients Regarding the Efficacy of Reading Popular Psychiatric and Psychological Articles and Books," *Mental Hygiene*, 43:87-92, Jan. 1959.

199. Mower, J. W. "A Comparative Study of Hobby Activities," *Bulletin of Menninger*

Clinic, 4, 1940.

200. Mudd, E. H. and Whitehill, J. L. "The Use and Misuse of Books in Counselling," *Parent Education*, 14:2, 1938.

201. Mullahy, Patrick. "The Theories of Harry Stack Sullivan." *In* Mullahy, Patrick ed. *Oedipus: Myth and Complex*. Hermitage House, 1952, p. 301.

202. Murphy, Gardner. *Human Potentialities*. Basic Books, 1958.

203. Oathout, Melvin C. "Books and Mental Patients," *Library Journal*, 79:405, 1954.

204. *Objectives and Standards for Libraries in Correctional Institutions*. American Library Association, 1962.

205. O'Halloran, Wayne. "Group Psychotherapy and the Criminal—An Introduction to Reality," *American Journal of Correction*, 23:26, May-June 1961.

206. Panken, Jacob. *The Child Speaks*. Holt, 1941.

207. Pattison, H. A. *The Handicapped and Their Rehabilitation*. Charles C. Thomas, 1957.

208. Petersen, M. C. "The Hospital Library in Relation to Psychiatric Research," *Transactions of the American Hospital Association*, 37:608-614, 1937.

209. Peterson, M. V. "Use of Books in the Rehabilitation of Amputees in Military and Veterans Administration Hospitals." Unpublished Master's thesis, University of Denver, 1949.

210. Pomeroy, Elizabeth. "Veterans' Hospital Librarians Meet in Washington," *U. S. Veterans Administration Medical Bulletin*, 5:637, 1929.

211. Pomeroy, Elizabeth. "Bibliotherapy—A Study in Results of Hospital Library Service," *Medical Bulletin of the Veterans Administration*, 13:360-364, April 1937.

212. Postel, Horold H. "The Effect of Adapting Reading Meterials to Seriously Retarded Pupils," *Elementary School Journal*, 37, 536-540. March 1937.

213. Postel, Horold H. "Hospital Libraries," *Medical Bulletin of Veterans Administration*, 7: 986, 1931.

214. Powell, J. W. "Group Reading in Mental Hospitals," *Psychiatry*, 13:213-226, May 1950.

215. Powell, J. W., *et al.* "Group Reading and Group Therapy," *Psychiatry*, 15:33-51, Feb. 1952.

216. Pratt, Theresa E. "Patients' Libraries and Musical Activities in a Mental Hospital," *Occupational Therapy and Rehabilitation*, 19:379-386, Dec. 1940.

217. Pratt, Dallis. "Values—Their Dynamics in Behavior and Psychotherapy," *Journal of Pastoral Care*, 9:189-202, 1955.

218. Quint, M. D. "The Mental-Hospital Library," *Mental Hygiene*, 28:263, 1944.

219. Redl, Fritz. "What Can We Do for Them Right Now?" *Top of the News*, 17:51, Oct. 1960.

220. Rioch, D. and Stanton, A. "Milieu Therapy," *Proc. A. Res. Nerv. Ment. Dis.*, 1953.

221. Richards, T. W. *Modern Clinical Psychology*, McGraw-Hill 1946.

222. Ritey, Hector J. "The Psychological Background of Recidivism," *Archives of Criminal Psychodynamics*, 1:898, Fall 1955.

223. Robinson, G. S. "Institution Libraries of Iowa," *Modern Hospital*, 6:131-132, 1916.

224. Rodier, Ruth E. "Prescribed Reading in a Veterans Administration Hospital," *Medical Bulletin of the Veterans Administration*, 18: 80-82, July 1941.

225. Rogers, C. R. *Client Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Houghton-Mifflin, 1951.

226. Rogers, C. R. *On Becoming a Person*. Houghton-Mifflin, 1961, pp. 39-57.

227. Ruch, Floyd L. *Psychology and Life*, 5th ed. Scott, Foresman, 1958.

228. Ruggerello, Thomas J. "The Feel of a Book," *Wilson Library Bulletin*, 35:380, Jan. 1961.

229. Russell, David H. "Identification Through Literature," *Childhood Education*, 25:397-401, May 1949.

230. Russell, David H. and Shrodes, Caroline. "Contributions of Research in Bibliotherapy to the Language-Arts Program," *School Review*, 58:335-42, Sep. 1950 and 58:411-27, Oct. 1950.

231. Russell, David H. "Reading and the Healthy Personality," *Elementary English*, 29 195-200, April 1952.

232. Rust, Isabelle H. "Bibliotherapy in Mental Hospitals and Tuberculosis Sanatoria." Unpublished M. L. S. thesis, Carnegie Institute of Technology, Library School, 1950.

233. Ryan, Mary J. "Bibliotherapy and Psychiatry: Changing Concepts, 1937-1957," *Special Libraries*, 48:197-199, May-June 1957.

234. Sadler, William. "Therapeutic Reading and Study," *Modern Psychiatry*. Ch. 60, 780-789. Mosby, 1945.

235. Salter, Andrew. "Conditioned Reflex Therapy," Capricon Books, 1961.

236. Schneck, J. M. "Studies in Bibliotherapy in a Neuropsychiatric Hospital," *Occupational Therapy and Rehabilitation*, 23:316, 1944.

237. Schneck, Jerome M. "Bibliotherapy and Hospital Library Activities for Neuropsychiatric Patients: A Review of the Literature with Comments on Trends," *Psychiatry* 8:207-228, May 1945.

238. Schneck, Jerome M. "A Bibliography on Bibliotherapy and Hospital Libraries," *Bulletin of the Medical Library Association*, 33:341-356, July 1945.

239. Schneck, Jerome M. "A Bibliography on Bibliotherapy and Libraries in Mental Hospitals," *Bulletin of the Menninger Clinic*, 9:170-174, Sep. 1945.

240. Schneck, Jerome M. "Bibliotherapy for Neuropsychiatric Patients; Report of Two Cases," *Bulletin of the Menninger Clinic*, 10:18-25, Jan. 1946.

241. Schneck, Jerome M. "Bibliotherapy in Neuropsychiatry." *In* Dunton, W. R. and Licht, Sidney eds., *Occupational Therapy, Principles and Practice*. 197-223. Charles C. Thomas, 1950,

242. Seirer, Lawrence A. "A Layman Leads a Great Books Group in a Mental Hospital," *Mental Hygiene*, 45:537-542, Oct. 1961.

243. Sharp, E. Preston. "The Philadelphia Team —Free Library and Youth Study Center," *ALA Bulletin*, 55:324-328, April 1961.

244. Shrodes, Caroline. "Bibliotherapy: A Theoretical and Clinical Experimental Study." Unpublished Ph. D. dissertation, University of California, 1949.

245. Shrodes, Caroline. "Bibliotherapy," *Reading Teacher*, 9, 24-29. Oct. 1955.

246. Shrodes, Caroline. "Bibliotherapy: An Application of Psychoanalytic Theory," *American Imago*, 17:311-319, 1960.

247. Smith, C. Richard. "Survival of Tubercle Bacilli in Books," *American Review of Tuberculosis*, 46:549, Nov. 1942.

248. Smith, Donald E. P., and Carrigan, Patricia M. "The Nature of Reading Disability" Harcourt, Brace, 1959.

249. Smith, Nila B. "A Bibliography on Bibliotherapy," *Bulletin of Medical Library Association*, 33:341, 1945.

250. Smith, Nila B. "Bibliotherapy" *Psychiatry* 8:207, 1945.

251. Smith, Nila B., "Bibliotherapy for Neuropsychiatric Patients," *Bulletin of Menninger Clinic*, 10:18, 1946.

252. Smith, Nila B. "Some Effects of Reading on Children," *Elementary English*, 25:271-8, May 1948.

253. Smith, Nila B. "The Personal and Social Values of Reading," *Elementary English*, 25, 490-500. Dec. 1948.

254. Staniszenewski, Irene. "Bibliotherapy and the Child Who Has Problems." *Illinois Catholic Librarian* 3:11, 26-8, January-April 1947.

255. Stein, Elizabeth A. "Bibliotherapy: A Discussion of the Literature and An Annotated Bibliography for the Librarian." Unpublished M.S.L.S. thesis, Western Reserve University,

School of Library Science, 1950.

256. Strang, Ruth. "Mental Hygiene of Gifted Children," *The Gifted Child*, ed. by Paul Witty, D. C. Heath and Co. 1951, 131-162.

257. Strachey, J. "Some Unconscious Factors in Reading," *International Journal of Psychoanalysis*, 11, 1930.

258. Strassler, Margaret G. "For the Handicapped," *Library Journal*, 79:2240-2244, Nov. 15, 1954.

259. Strong, Edward K., Jr. "Vocational Interests of Men and Women" Stanford University Press, 1943.

260. Sullivan, Harry Stack. *Conceptions of Modern Psychiatry*. William Alanson White Psychiatric Foundation, 1947, p. 43.

261. Sundin, Dorothy. "Reading Levels of Adult Mentally Retarded Patients." Faribault State School and Hospital, 1962.

262. Sweet, Louise. "Reading Predilections of Patients in Veterans Hospitals," *U. S. Veterans Bureau Medical Bulletin*, 3:911-914, Sep. 1927.

263. Taba, Hilda. "Literature for Human Understanding," American Council on Education, 1949.

264. Tada, Hilda and Elkins, Deborah. *With Focus on Human Relations; The Story of An Eighth Grade*. American Council on Education, 1950.

265. Tarumianz, M. A. and Bullis, H. E. "Psychiatry's Ounce of Prevention" *School Executive*, 62:33-4, April 1943.

266. Taylor, E. R. "Books for Character Education," *American Childhood*, 26:43-4, Nov. 1940 and 26:31-2, Dec. 1940.

267. Tews, Ruth M. "Case Histories of Patients' Reading," *Library Journal*, 69:484-487, June, 1944.

268. Tews, Ruth M. "The Patients' Library." *In* Keys, Thomas E. *Applied Medical Library Practice*. Charles C Thomas, 1958, 57-134.

269. Thorne, Frederick C. *Principles of Personality Counseling. Journal of Clinical Psychology* 1950.

270. Toman, Walter. *An Introduction to Psychoanalytic Theory of Motivation*. Pergamon Press, 1960.

271. Underwood, Mary Beth. "Navy Bibliotherapy: Experiment in Group Reading," *Library Journal*, 80:1173-1176, May 1955.

272. U. S. Veterans Administration. *Bibliotherapy, A Bibliograpy* 1900-1952. Washington, D. C., U. S. Veterans Administration, 1952.

273. U. S. Veterans Administration. *Position Classification Guide* (Library Series, GS-1410-0) July 1952.

274. U. S. Veterans Administration. *Bibliotherapy, A Bibliography, Supplemental List*, 1955. Washington, D. C., U. S. Veterans Administration, 1955.

275. U. S. Veterans Administration, Department of Medicine and Surgery. "Planning Letter No. 55-85." Veterans Administration Hospitals, Nov. 1, 1955. (Mimeographed.)

276. U. S. Veterans Administration, Department of Medicine and Surgery. "Planning Letter No. 56-124." Veterans Administration Hospitals, Dec. 31, 1956. (Mimeographed.)

277. U. S. Veterans Administration, Department of Medicine and Surgery. "Planning Letter No. 57-4." Veterans Administration Hospitals, Jan. 17, 1957. (Mimeographed.)

278. U. S. Veterans Administration, Department of Medicine and Surgery. "Planning Letter No. 58-48." Veterans Administration Hospitals, June 11, 1958. (Mimeographed.)

279. *Using Bibliotherapy As a Counseling Techique*, Stephens College News Reporter, 2:5, May-June 1943.

280. Vainstein, Rose. "The Role of the Public Library in Education for the Aging," *Adult Leadership*, 9:10, May 1960.

281. Veatch, Jeanette. "Children's Interests and Individual Reading," *Reading Teacher*, 10 160-165. Feb. 1957.

282. Vernick, Joel. "The Use of the Library in a Psychiatric Setting," *Top of the News*, 16:27-

30, May 1960.

283. Wahal. K. M., and Riggs, H. E. "Changes in the Brain Associated with Senility," *Archives of Neurology*, 2:15-159, 1960.

284. Webb, G. B. "The Prescription of Literature," *Transactions of the Association of American Physicians*, 45:13-30, 1930.

285. Weingarten, Samuel. "Developmental Values in Voluntary Reading," *School Review*, 62 222-230, April 1954.

286. Wenzel, Evelyn. "Children's Literature and Personality Development," *Elementary English*, 25:12-31, Jan. 1948.

287. Wheelis, Allen. "The Place of Action in Personality Change," *Psychiatry*, 13:135-148, 1950.

288. Whitaker, C. A., and Malone, T. P. *The Roots of Psychotherapy*. Blakiston Co. 1953.

289. Whitehorn, John C., Jr. "Guide to Interviewing and Personality Study," *Archives of Neurology and Psychiatry*, 52:197-216, Sep. 1944.

290. Whitehorn, John C. "Goals of Psychotherapy." *In* Rubinstein, Eli and Paroff, Morris B. eds., *Research in Psychotherapy*. American Psychological Association, 1959.

291. Whiternan, Howard. "Teach Our Children How to Live," *Woman's Home Companion*, 74:32-3, 134, June 1947.

292. Wilson, J. Watson. "The Treatment of an Attitudinal Pathosis by Bibliotherapy: A Case Study," *Journal of Clinical Psychology*, 7:345 -351, Oct. 1951.

293. Wolberg, L. R. "Bibliotherapy," *The Technique of Psychotherapy*. Grune and Stratton, 1954, pp. 578-582.

294. Wolff, Werner, ed. "Values in Personality Research," *Personality*, Symposium No. 1, April 1950.

野間教育研究所紀要

新刊・第23集

田中博正・辰野千寿・清水利信・阪本敬彦著

学業不振児の心理学的研究　　定価　800 円

既　刊　　（＊印絶版）

第1集	土屋忠雄他著	女子教育特輯	125円
第2集	土屋忠雄他著	社会教育実態の研究	300円*
第3集	辰野千寿著	児童の学習	300円*
第4集	吉田昇著	学生生徒の生活教育	200円
第5集	宮坂哲文著	ホームルームの実態調査	250円*
第6集	尾形裕康著	中世の芸能教育	150円
第7集	西平直喜著	青年両親関係の心理学的研究	250円*
第8集	辰野千寿著	学習と賞罰	180円
第9集	石川謙著	語彙集型往来について	250円
第10集	野間教育研究所編	家庭環境の教育に及ぼす影響	500円*
第11集	土屋忠雄著	明治十年代の教育政策	250円*
第12集	藤原喜悦著	青年期に関する心理学的研究	300円
第13集	辰野千寿著	学習の研究	280円*
第14集	辰野千寿著	遡及禁止の研究	300円
第15集	石戸谷哲夫著	日本教員史研究	500円*
第16集	石川謙著	日本学校史に関する研究	230円
第17集	辰野千寿著	遠隔連合の研究	300円
第18集	田中博正著	構えの研究	300円
第19集	尾形裕康著	西洋教育移人の方途	780円
第20集	倉内史郎著	明治末期社会教育観の研究	600円
第21集	長島貞夫著	操作的方法による自我の心理学的研究	1200円
第22集	倉内史郎他著	企業内教育の動向調査	750円

発行　財団法人　野間教育研究所

発売　株式会社　講談社

東京都文京区音羽町3—19・振替東京3930

Vol. 8. No. 3 February, 1965

昭和四十年二月二十日発行（年四回発行）
昭和三十一年十二月二十七日国鉄特別扱雑誌第三三七三号

THE SCIENCE OF READING

Edited by The Japanese Society for the Science of Reading
President : Sakamoto, Ichiro
c/o The Faculty of Education, Tokyo University of Education, Japan

CONTENTS

Bibliotherapy

A historical review of bibliotherapy.
MUROFUSHI, Takashi 1

On the theories of bibliotherapy.
ONO, Yasuhiro 8

Bibliotherapy in psychiatry.
SAKAMOTO, Takahiko
TAKAGI, Kazuko 16

"Bibliotherapy" by C. Shrodes
SAKAMOTO, Takahiko
YAMANAKA, Teruko 25

A review on the study of bibliotherapy in Japan
SAKAMOTO, Ichiro 30

The bibliography for the study on bibliotherapy
Noma Institute of Educational Research 36

第8巻 第3号
<通巻 第29号>
昭和40年2月15日 印刷
昭和40年2月20日 発行

定価 300円

東京都文京区大塚窪町24
東京教育大学教育学研究室内
振替東京3213番

編者 日本読書学会
代表 阪本一郎

発行者 東京都新宿区揚場町1
牧義雄

発行所 株式会社 牧書店
東京都新宿区（牛込局区内）揚場町1

IBM 6655

印刷・第一印刷株式会社